

俳句雑誌

令和七年三月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十八巻第三号

水明

2025 3月号



《今月のかな女》

春の夜や脱ぎし頭巾に男ぶり

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

かな女が歌舞伎の「隅田春妓女容性(すだのはるげいしやかたぎ)」を観劇しての即興句と思われる。娘の頃から芝居好きであったかな女の歡びと興奮が、この一句に溢れている。頭巾の人物は、江戸時代初期に大阪に居た「梅洪吉兵衛」という殺人犯であるが、歌舞伎では、悪人と対峙する好漢である。見せ場で、「宗十郎頭巾」をさらりと脱いで観客を魅了する。その男振りにうっとりしたかな女。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

鶉の瀬から春を立たせる水飛沫

島津初花

季音月

除雪車の唸り地響く深夜かな

松宮保人

季音花

小春日や島の渡しに旅役者

笹本啓子

水明集

円窓はしぐれて色のなき季に

菅原真理

鼓笛集

中七に毒ひそませて初句会

森下山菜

山紫集

雑踏のひとのほひや冬ぬくし

霜多光代

水明

令和 7 年
3 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

神の木 (作品)

山本鬼之介

4

春を待つ (近詠)

石山かつ子

6

句の道 (近詠)

鈴木康世

7

雪 嶺 雪欄作家作品鑑賞

染谷風子

8

ゆずり葉 季音月評

檜鼻ことは

10

季音「雪」 (同人作品)

島津初花 鈴木康世
十倉和子 ほか

12

季音「月」 (同人作品)

松宮保人 原田秀子
上戸千津子 ほか

18

季音「花」 (同人作品)

笹本啓子 保坂翔太
梅澤輝翠 ほか

23

現代俳句鑑賞

網野月を

28

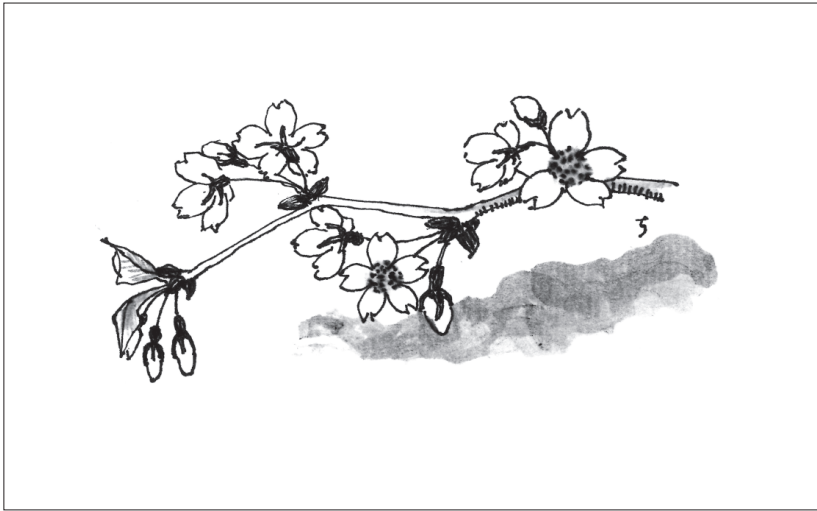
『水明誌』を緋く

黒澤麻生子

30

水明創刊九十五周年記念特別作品募集

31



俳誌望見

梅澤輝翠

句集喝采

菅原卓郎

水明集

菅原真理
小林京子

皆川更穂
ほか

作品鑑賞

山本鬼之介

水琴窟 (水明集一月号鑑賞)

池田雅夫

鼓笛集

50

山紫集

54

新春俳句大会の記

青木鶴城

60

水明の記事他誌より転載

62

水明例会報・各地句会報

63
66

水明忌・春の吟行会・全国大会のお知らせ

71

風声・発展基金御礼

74

後記

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

神の木

山本鬼之介

しで紐をほどく指先春寒し

跳人のごと余寒の庭に来る雀

料峭や万感こめて笙の笛

降臨の千年杉や冴返る
神宮の神馬の朝よ水温む
ワイナリーで陶然となる遅春
野仏に供花の匿路や草青む
名を問へば「しづ」とひと言別れ雪

春を待つ

石山 かつ子

侘助の白の誇りや花数多
入口にはせをの句碑や冬うらら
甘酒のほのかな句ひ春近し
三極の毬を作つてゐる途中
梅一輪母子でうたふ童唄
ひとかたまりに薺・清^{すずしろ}白風の中
紅梅の白梅の庭人を待つ

一月も半ば過ぎると、私の住む街岩槻では雛の店で賑わいます。ある会で、家にある雛を持ち寄つてそれを絵に描いてみようという事になりました。
内裏雛・紙雛・土雛・貝雛等いろいろ机上に飾ってみました。その中の雪洞と菱餅の大きいのが特に目につきました。とりわけ菱餅の角が鋭く尖っているのが気になりました。重ねの色が気になり調べてみますと、三段の白は雪が融けて生命力のたくましく新芽がだんだんと緑になりやがて美しい香りの高い桃の花になります。それで三月三日の雛まつりには桃の花を飾り祝うのだそうです。

句の道

鈴木康世

寂寥の庭に彩り実千両
見慣れたる校舎の屋根の初茜
句の道が続けてゆけと初電話
平和・愛・絆の文字を筆始め
読初や富士山噴火に入り込む
穏やかな晴れの続きで小正月
手鞠唄聞こゆ公園夕間暮れ

白内障の手術をして眼鏡をかけずに物を見たり本を読む事が出来るのは転ぶ事が怖くて外出が出来ずに居た私には嬉しい。家中の本をランダムに読んでいる。先日医師に少しでも歩く様に言われ家の周りを杖を頼りに歩く事に、見過ごしていた植物が育っていた。桜千両・曼珠沙華など、前には無かった物達、何処から種が飛んで来たのか。自然界の驚異を思うと同時にこの小さな庭を大切にしよう。

雪 嶺

季音雪欄作家近詠鑑賞

染 谷 風 子

◇城の秋（十一月十二月合併号）

大橋 昶代

◇秋そぞろ（十一月十二月合併号）

星野和葉

城の秋水抜き調査はじまれり
郷ひろみと鯉の格闘泥まみれ
月代やまだ見つからぬ五百両
さわ立てる鴨とおどおど近づきぬ
穴まどひつるび一塊武者溜り
内緒です番ふ秋蛇見しことは
みんなみに列なす雲や曼珠沙華

一句目、和歌山城の水抜き調査は、昨年九月二二日（日）
「緊急SOS！池の水抜く大作戦」としてテレビ東京から全
国放映された。築城以来初めての水抜き調査で、古い自転車、
江戸時代の家紋入り瓦等の他に特大鯉が出現した事を記憶し
ている。二句目、水抜き調査には郷ひろみも参加していた。
鯉は釣人に「臭い」と嫌われ、外道扱いされている。国民的
アイドルと特大鯉の泥塗れの格闘を詠んだユーモア溢れる句
三句目、「月代」は秋の季語で、月が出ようとする時、空が
白んで明るく見えることをさす。しかしこの句では、下五の
「五百両」と照応して、江戸時代の男子の髪結いの「さかや
き」に見えてくる。『冥土の飛脚』の封印切りは三百両だが、
「見つからぬ五百両」はどんな芝居か。上方歌舞伎の世話物
に思いが馳せる、白日夢のような句である。五句目、六句目
は冬眠前の秋蛇への優しい目差しの愛に満ちた生命讃歌の句。

眼科医にふくろふ数多風は秋
難聴に優しく今日の法師蟬
検査結果良好揺るる白木槿
箎にそそといのちの色を秋茄子
「光る君へ」に寄り添ひ揺るる実紫
稀な季に迷はず咲けり曼珠沙華
薄ひと叢そよぎ一端の庭なりし

一句目、「ふくろふ」は冬の季語であるが下五に「風は
秋」とあるのでこれは秋の句。フクロウ類は夜行性で、聴覚
および視覚が非常に発達しており、完全な暗闇の中でも捕食
できる。眼科医院の周囲の「母食鳥」とも称され不吉な鳥と
みなされる梟の群れと、万物を凋落させ、身に沁みてあはれ
を催す秋風との取合せ。無気味な深淵を感じさせる句である。
三句目、木槿は朝に開き夜は凋むため「槿花一日の栄」と譬
えられる一日花である。作者はこの句にあえてそこまでの深
意を詠まない。体調不安から精密検査を受け、その結果は
「異常なし」。作者は素直に喜び、可憐な白木槿に己の喜びを
託している。四句目、秋茄子の紺を「いのちの色」と形容表
現した手腕は秀逸。五句目、「光源氏」へ寄り添う原作者紫
式部。季語の擬人化を通した作者の技法に感服。六句目、昨
年は秋が短かった。その中での秋を忘れぬ曼珠沙華の発見。

◇実る（二月号）

茂木和子

蔓引けど引けども宙の烏瓜
瓢の実のひょうひょうと鳴く父こひし
万年青の実熟れて私を振り向かす
御湿りの後の眼 福冬 珊瑚
こんな日は語らひつきぬ実千両
葉隠りの万両言の葉の重し

一句目、秋の蒼天の中に映える朱赤色の鮮やかさ。青と朱の取合せが美しい。二句目、「瓢の実」は「青瓢」の傍題で別に「青瓢箪」という傍題もある。俗にまだ熟していない青い瓢箪で、やせて顔色が青い人をあざけて言う語である。青瓢箪が「飄飄」と風に吹かれて翻り、浮き世の辛さに耐えかねて父を呼ぶ景は寓話的だ。現代青年を見る作者の眼は厳しい。「母こひし」でないだけまだましか」と言う作者の声が聞こえて来る。三句目、前句と対象的な一句。「万年青の実」は艶のある濃い緑の葉の中に、初めは青いが晩秋に真赤に色づく実だ。真赤に熟した、珊瑚玉のような「万年青の実」に作者は自分を投影し、感情移入しているかと思える。熟した真紅の「万年青の実」は作者の現在の心境か。「万年青」という漢字表記が作者の心を擱んでいるのかも知れない。四句目、雨に打たれ、一段と鮮やかさを増した冬珊瑚の紅色の実。その直接の感動を「眼福」という漢語で正確明瞭に表現し、すつきりとした句に仕上げている。五句目、作者は誰と何を語らいつきなのか。実千両がそれを解く鍵かと思う。単なる写生を超えた作者の詩心を垣間見る六句である。

◇庭の花づくし 晩秋（二月号）

永野史代

灯されて仏間の障子 仄暗し
認知症かしら真紅の木瓜の返り花
教会のオルガン 聞こゆ雁来紅
誰を待てり首を伸して石露の花
秋明菊の白ひらひらと揺れてをり
柿熟れて夕陽は焦げる焦げるかな
影もなし小さき冬の薔薇咲いて

一句目、冬の日、灯明の点された仏間の白い障子の仄暗さ。宗教的な荘厳と、静寂な冬日の季感に満ちた句である。二句目、木瓜は春に、温かみのある、なごやかな、いかにも春にふさわしい花を咲かす。しかし鋭い刺がある。作者は真紅の木瓜の返り花を見て、木瓜が認知症に罹ったと表現した。「木瓜」と「呆け」の同音語の言葉遊びだ。上五の口語表現がユーモアを深めている。三句目、教会から聞こえてくるオルガン音。パイプオルガンの奏ではミサ曲か讃美歌か。ステンドグラス越しの淡い光の中の気高い宗教音楽に想いが至る。花でなくあえて葉を愛でる「雁来紅」と宗教音楽の取合せは西洋的な雰囲気を出している。四句目、石露の花は初冬に長い花茎を伸ばし、黄色い頭花を多数付ける。この句は上五を終止形で切り、主語「石露の花」を下五に置き、下五・中七・上五へと続く倒置構造を作り、リズムを整えている。六句目、赤い柿とそれに負けない燃える夕焼け空。日本人誰もが郷愁を覚える景である。「焦げる焦げる」とリフレインを利かせ、下五をかな止にした。燃える夕陽が鮮明だ。

ゆずり葉

◆季音一月

檜鼻 ことは

雁鳴くと直実ゆかりの坊泊り

十倉和子

中村吉右衛門さん渾身の舞台「一谷嫩軍記 熊谷陣屋」を観たのはもう何年も前のことです。義経に「一枝を伐らば一指を剪るべし」の制札に事寄せ、敵の武将 平敦盛の命を助けよと命じられた直実は、主命にこたえるため、自分の息子小次郎の首を敦盛の身替りにします。首実検のあと義経に出家を願ひ出、墨染めの衣に身をつつみ、息子が生まれてからの十六年が夢のように立ち去っていく直実の姿が哀れでした。史実に寄れば、敦盛を討った直実は法力房蓮生と称し出家。いくつかの寺院を開基しています。熊谷市は直実の出生の地。熊谷市にある熊谷寺（ゆうこくじ）のご住職は熊谷直実のご子孫と伺った記憶があります。作者は何れの坊にお泊りになったのか、「雁鳴く」の季語がものあはれを誘い、直実の物語を思い出した次第です。

いわし雲十八切符握りしめ

大村節代

「青春十八きっぷ」は、各停の列車に限りませんが、五日間連続使用が出来る格安切符。例えば「東京→四国經由→熊本→山陰經由→東京」の所要約六十時間の旅にこの切符を使えば、通常四万数千円するところを一万円弱の運賃で旅をすることが出来ます。青春十八と言う名称なので購入に年齢制限がありそうですが、そのようなことはなく、実際の所、二十歳以下の人たちよりも六十歳以上の利用者のほうが多いらしい。以上のことは鉄旅を趣味としている友人から聞いた話なのですが、これは一度やってみなくてはと、かねがね思っていたところでした。

さて、作者の鉄旅の行き先は何処だったのでしょう。「握りしめ」という措辞から伝わって来る作者のわくわく感、よくわかります。日常を離れ、車窓から見える景色をのんびりと楽しみ、極上の鉄旅をされたに違いありません。羨ましい限りです。

菊 膾 藍 の 器 を 揃 へ た る

森川 義子

菊膾、菊の花びらを、酢を入れた湯で、三杯酢やくるみらえ、胡麻和えにした料理ですが、実際の所、私の住んでいる地域ではあまり馴染みなく、調べてみますと岩手や山形、新潟あたりでは八百屋の店先に食用菊が並んでいて、日常的に食されているようです。滋賀県でも古来より食されているらしく、松尾芭蕉は、堅田で歓待を受けた時「蝶も来て酢を吸ふ菊の膾哉」という句を残しています。写真で菊膾を拝見すると見た目にも華やか、とても色鮮やかなお料理です。藍色の器であれば、菊膾をいっそう魅力的に引き立たせることでもあります。何かのお祝いで、おもてなしをされるのでしょうか。美しい料理と器は、席に品格と華やかさをもたらします。心のこもったご準備をされているご様子が句から伝わってきます。

小 鳥 来 る 枝 に 庭 師 の 豆 絞 り

笹本 啓子

「豆絞り」という措辞だけで、粹で鯉背な庭師さんの姿が思い浮かんでくるから不思議です。頭に手ぬぐい、腕に手甲、乗馬ズボンに足袋と脚絆、本藍染の半纏とくれば、もう何も言う事がありません。閑話休題、秋の庭の手入れと言いますと、剪定の他、伸びてきた生垣の刈り込みや庭木の植え付けなど、自分で出来ないことはありませんが、庭師さんの仕事

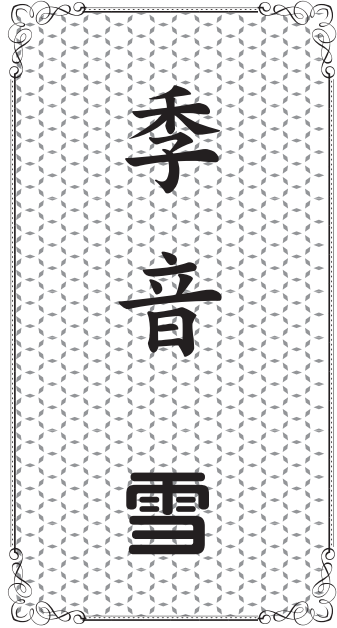
はやはり女人の仕事、その技にほれほれとしてしまいます。休憩の時など、お茶でも飲んでもらいながら聞く庭師さんの話は面白く、いろいろと庭の手入れのコツなども教えてもらえます。

穏やかな秋の晴れ間の庭仕事、句の持つ小気味よいリズムが庭師さんの手際のおいしさを伝えてくれているようです。豆絞りが句においても良いアクセントになっていて、気持ちの良い庭の景色を見せていただきました。

日 に 五 便 バ ス 来 る 村 の 下 り 鮎

森 和子

鮎漁の時期は地域によって異なりますが六月〜十月が一般的。解禁当初の若鮎のころは骨がやわらかく食べやすい。九月から十月になると鮎は産卵のため目方も増え下流へと下る時期。子持ち鮎ともよばれる時期で、産卵前の落ち鮎も若鮎とは違った美味しさ。鮎漁ができる河川は全国各地にあります。私の住まいの近くでは滋賀県旧朽木村を流れる安曇川、小浜市より旧名田庄村〜京都府美山町を抜け京の清滝に至る通称「周山街道」沿いの南川などがあります。いずれも日本の原風景とも言える景色がどこまでも続き、美しい自然の中に身を置くことが出来る場所です。「日に五便バス来る村」の措辞が、その美しい景色を鮮やかに思い起こさせてくれました。鮎釣りの楽しみは、釣りは勿論のことながら、俗世間を離れ、日がな一日、美しい自然の中で過ごすことができることにもあるのでしょう。



朱塗椀 鈴木康世

猫と目が合うてしまひし初明り
恙無く三世揃ひ屠蘇祝ふ
朱塗椀一つ増えたる雑煮膳
雑煮食ぶ昭和平成令和生き
賜りし命だいじと初日記

寒の水 島津初花

大旦 十倉和子

松の内何事も無く日暮れけり
青銅の龍の吐き出す寒の水
米研けば初乳のごとき寒の水
唇を濡らしたままの寒の水
鵜の瀬から春を立たせる水飛沫

われらが城は威ありて親し大旦
初夢は生家の間取り桐箆筒
深夜放送うつらうつらと去年今年
もう一度も一度と振る初神籤
城濠を沸かす放水出初式

のほほん 鳥羽和風

薦被り 星野和葉

のほほんと宙に浮くよな春の風邪
春の星きらきら落つる砂時計
野焼して初心に還る農日記
天地に進行形の露の花
野火の香を夕餉の中へ持ち帰る

薦被りでんと輝く千代の春
ビオラ背に街颯爽と初巳かな
芝居跳ね身の熱きまま恵方道
竹刀振るをとこ片肌竜の玉
紅白に分かるる族かるた取り

霜 夜 永野史代

特定郵便局 町野広子

霜夜なり故郷父母の声なさず
霜夜なり若狭の佛目を冥り
越前の和紙の手触りやさしかりけり
枯木山鋼のやうな芯を持ち
傷だらけの青春傷だらけの大根

よく切れるキッチン鉄霜の夜
たつぷりと霜夜の保湿化粧品
口堅き花柳の巷冬紅葉
昼休み一時間師走の特定郵便局
山枯るる保養所にある卓球台

初詣 茂木和子

屋形の燈 山中みどり

鈴の緒の終日ゆるる初弁天
沼面の波の穂ひかる初弁天
子は石段を跳ねては飛んで初詣
朝明けの黒の群舞や初鴉
冬紅葉会ふも別れも手を振りて

御厩の渡しの辺百合鷗
破れ幟お焚き上げして初地藏
熱々の甘酒うれし初地藏
紅燈の屋形一隻冬の川
団扇太鼓の列通り過ぎ冬の星

加持棒 森本早苗

礼拝堂白し 網野月を

伽^が耶^や院のヒカリモとやら初詣
静寂を打つ加持棒や初詣
霜柱熱き視線の山ガール
そつと出す七草雑炊二杯目を
初御空前掛朱き狛狐

散り際を索めてゐたり姫つばき
満天星の葉を落としけり冬木風
伝統のいまは現代親子草
枯芝や縁に椽など吹き溜まる
枯れ石露や御堂へのぼる大谷石

唇にピアス 石井喜恵

鍬 始 石山かつ子

唇にピアスポインセチア真つ赤
隙間風防犯二重窓硝子
霜の夜や一子相伝能舞台
一灯を残す霜夜の無人駅
枯葉踏む雨も小止みの石畳

朝東風や高く掲ぐる大漁旗
米寿を祝ふ赤き綿入れちやんちやんこ
塀の穴よりのぞく親しき嫁が君
まゆ玉を辻の地藏に馬頭碑に
畑に挿す榊ひとえだ鍬始

女 正月 井上燈女

初 凧 大橋廸代

地を蹴つて天へとどろけ初太鼓
からつぽの都会へもぐる初電車
女正月といふ安らぎの開放感
冬至粥みな息災に老いにけり
米寿を踏み出す朝の寒紅梅

船長の宿は路地奥獅子頭
かんなぎの追従笑ひ初神籤
初凧や鯛釣り舟のひしめける
乗初は逢魔が時の救急車
縫初や妣の大ぐけすべりよし

寒 鴉 大村節代

天守閣に銃眼あまた冬木の芽
野面積みの天空の城寒鴉
冬紅葉閉門近き比丘尼御所
枯野行く顔の小さくなつてをり
故郷の夕日豊かに寒鴉

お 初 小倉倭子

初詣 心身拝す奥の院
初旅の気脈を通じ嫁やさし
豊かなる胸を湯船に初日の出
「お先へ」と初湯に撫で肩後ろ髪
初神くじ人生それぞれ春を待つ

垣根越し 栢尾さく子

水仙の自立の不安烈風に
山茶花の垣根越しに来る訃報
蟹食べて指をまた拭く雪催ひ
毛布被て孤独の夢のつづき追ふ
まな板に生きる喘ぎの金目鯛

枯 野 菊池ひろこ

枯野より来て口遊ぶ古旋律
門松を置けば揺れやむ配電線
茶の花や歯を見せ笑ひ皇女たり
数へ日のカーテンの輪のはづれ癖
陽当たりも和洋折衷冬の蜂

入日燦 五明昇

遠山に疊む夕日や大枯野
 入日燦峡の湯宿の冬紅葉
 車懸りに枯葉渦巻く古戦場
 着ぶくれに愛想を包む朝市女
 泣きたき夜先に哭き出す虎落笛

小さき幣 境延昭

田の角に小さき幣立つ今朝の春
 お年玉絵柄で択ぶ点袋
 初弁天千畳敷は吹き曝し
 番台の消えし銭湯冬日和
 風花す旅の一座ののぼり旗

特集 行楽の春——春の行事季語

特集 俳句の宙二〇二四 精選アンソロジー作家作品集

巻頭作品10句

暮目良雨・行方克巳・嶋田麻紀
 西山 睦・辻 恵美子・長浜 勤
 小澤 實・野中亮介

俳壇

4月号

3月14日発売
 定価1000円(税込)

巻頭エッセイ
 浅沼 璞

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅳ期」……朝妻 力・村上喜代子

季節の移ろい(二十四節気)……梶谷予人
 俳人の住む町……辰巳奈優美・戸恒東人
 編集室の風景……銀漢俳句会
 二度目の俳句入門……長谷川 權
 旧派の俳句……秋尾 敏
 知つてるようで知らない俳句用語……井上泰至
 句集出版よもやま話……渡辺純枝

俳句と随想12か月

安田のぶ子・矢野景一

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

季音月

雨 水 松宮保人

手毬逸れ追つ掛けをれば夕間暮れ
 除雪車の唸り地響く深夜かな
 雨水透く秘湯の朝の散歩道
 一つ跳び二つ跳び来る寒雀
 湖水る音の幽かや諏訪の宿

冬 菜 原田秀子

小松菜は江戸の生まれと胸をはり
 無農薬自慢の冬菜穴ひとつ
 目一杯空気を羽織り冬雀
 白息をかけて手鏡甦る
 金釘流それも一興賀状書く

廃屋 上戸 千津子

廃屋も歴史ありけり雪背負ひ
 朝日影砂金に似たり今朝の霜
 我が里の海の匂や睨み鯛
 皆の古いそれぞれ違ひ新年会
 窓越しや狭庭の樹水一夜漬け

この年の 松井 由紀子

冬晴や疎林の奥に雲ひとつ
 寒月の清流のごと来るひかり
 木枯に絡まれてゐる一輛車
 凍つる夜や瞬き止まぬ満都の灯
 この年の序章きりりと寒の梅

自画像 内田 恵子

レイアウト替ふる我が部屋日脚伸ぶ
 自画像と向き合ふ画室冬紅葉
 龍の玉宇宙の果てはどんな色
 自画像が吾を見詰めてゐる霜夜
 ひとり居の霜夜の耳を啓きをり

沈金の鶴 梅澤佐江

沈金の鶴の舞ひたる雑煮椀
独り居の斯くも小さき鏡餅
初手前花びら餅の紅ほのか
水琴窟の音色澄みたる冬日和
力瘤確と溜めたる枯櫛

初富士 大場順子

初富士の白の莊巖拝みぬ
海老の目に海の色ある雑煮椀
北前船の縁の丸餅雑煮椀
初弁天帰りにひろふ金の鈴
A I 寒し紋切型のその応へ

年玉 高島寛治

冬晴の水音尖る綾瀬川
天を衝く城暮れ残る冬夕焼
年玉を妻にも包む我が傘寿
初富士の大きく見ゆる埼京線
遊ぶ子の声路地に満つ年新た

寄り添ふ 丸山マスマ

万年青の実日差しを吸ひていよ濃し
万年青の実日の斑の遊ぶ甃
姫街道吐息のやうな冬紅葉
冬晴や富士を見たさの観覧車
復興に寄り添ふ誓ひ年新た

石廊崎 近藤徹平

初日の出黒潮吠ゆる石廊崎
閻王の招き断り賀状書く
駅頭にたすきの弁士息白し
江の島の空に鳶の輪初弁天
島は春波止場流るるおけさ節

お正月 正木萬蝶

枯木立雄雄し定年退職日
千六本の乱れそのまま我が胸裡
朝まだき正倉院の淑気かな
雑煮祝ふ再嫁の味に早なじみ
雑煮祝ふ輪島の椀の艶やかに

手毬唄 山田 美佐尾

目をこらし冬の星見む港町
「トン・ツー」とモールス信号冬の星
生一本粋な料亭冬の星
寒鰯の目を見張るほどの耀の市
手毬唄歌ふ子の声「通りやんせ」

躰り口 池田 雅夫

二ヶ月の風の染み入る躰り口
立春の心構へを樹に倣ふ
寒明や一枚脱ぎてゆく散歩
降れば忌み降らねば恋し春時雨
閉校の庭ひたひたと雪解水

女正月 大塚 茂子

寒梅や五百羅漢の温顔に
跳箱を少女いつきに寒雀
落語跳ね甘味繰り出す女正月
疎抜きし冬菜の満つる御御御付
福寿草郷土の姪の子だくさん

丸餅 青木 鶴城

餅白に跳ぬる手水や返しの手
丸餅の雑煮に思ふ平和かな
日記帳書くこともなき松の内
来し方に何の憂ひぞ仏の座
冬薔薇痴呆となりし想ひ人

地上では 日高 道を

開戦日臨時ニュースのいま昔
天狼や独裁者蔓延る地上
冬銀河億光年の現在形
浮寝鳥水面に残る日の匂ひ
枯野道人はさ迷ふやうに行く

雪 飛永 鼓

湯豆腐の踊りはじめを見る二人
後振り返り振り返り雪を搔く
白一色の他に物なし雪を搔く
雪搔に小さき足跡続きけり
灰色の空見る日課春浅し

冬の朝 檜鼻ことは

小気味よき朝のあいさつ蕪汁
禅寺の庭の一隅花八手
雨そぼる森の祠や石路の花
大雪やさしても思案の文机
腰伸ばす作務衣の僧や春隣

瑞雲 荒井俱子

元号三つ生きて息災今朝の春
床の間の軸は瑞雲明けの春
雑煮餅みちのく訛り抜けぬ夫
凍豆腐里のたずきを語る夫
天界の父母の叱咤か冬の雷

初日の出 森川義子

穏やかに米寿を迎へ初日の出
ゆつくりと巡る寺町松の内
念入りに靴を磨きて初句会
澄み渡るみ空に凜と枯木立
越後路の午後はスカッと冬晴るる

五年日記 野口和子

蠟梅や隠れ家めきしコーヒー店
初日記五年日記の厚みかな
畳屋の深夜の明かり年用意
去年今年ことんと明日へ寝落ちかな
菜園の根菜に謝し雑煮椀

屠蘇祝ふ 西浦千枝子

一つ家へ車の多しお元日
兄弟手腕ほめあひ屠蘇祝ふ
人住まぬ家に大きな注連飾
雪かぶる故里の山絵画めく
運転に人柄の出る雪の道

冬晴 井上玲子

冬晴や遠望の富士燦々と
冬晴や日差しの中を闊歩して
冬晴や夕日にしづむ秩父嶺
生かされて卒寿となりぬ初句会
永らへて曾孫に与ふお年玉

京人參 福田千春

京人參の梅が一輪雜煮碗
振り向けばパックの妻や初笑ひ
初夢や天然色の母若し
寒雀出窓の猫のまるまると
とまり木の丸き一列寒雀

ダイヤモンド富士 熊倉千重子

慈母のやうなる陽射し賜はり初参り
初春のみくじの吉よゆるく結ふ
ダイヤモンド富士空に湖にと明けの春
七つ名を言うても見たり七日粥
風花を浴びて背伸びの乙女像

落葉道 川崎道子

いつか見たラストシーンの落葉道
よちよちと落葉踏むベビー靴
初みくじ境内の木に花咲かす
彼の人の得意札とるかるた取り
百人一首いまも忘れぬ恋の歌

駅伝 松山清子

鋤焼や女系三代顎寄せて
臘梅の香の中抜けて詣で道
駅伝に力をもらふ二日富士
裸木の骨太に見ゆ大樫
薬局にマスクする人溢れをり

角川俳句別冊カドカワ文庫 発売中 3300円税別

俳句年鑑 2025 年版

2023.10・2024.9

口絵 ● 二〇二四年一〇〇句選……小林貴子選
写真でたどる 二〇二四年の俳壇
【巻頭提言】……橋本榮治

年代別 二〇二四年の収穫
諸家自選五句……約六〇〇名！

今年の句集ベスト15 四協会の一年
今年の評論ベスト7 各俳句賞のひとびとほか

【合評鼎談】 横澤放川・辻村麻乃・抜井諒一
「総集編」 今年の秀句を振り返る
（令和俳壇「心に振る秀句」発表表）
（令和俳壇「心に振る秀句」発表表）

● 全国結社・俳誌 一年の動向 都道府県別自次付き！
● 全国俳人住所録 約二〇〇名を一挙掲載！

※内容は変更になる場合があります。

KADOKAWA 発行：角川文化出版興財団 発売：株式会社KADOKAWA
● お問い合わせ先（注文） TEL.0570-002-008 (KADOKAWA購入窓口)

季音花

旅役者

笹本啓子

小春日や島の渡しに旅役者
 枯木立罫に戻る鳥の群
 年新た結ぶみくじは跳ぶかまへ
 手捻りの一輪挿しに野水仙
 水仙や金色となる伊豆の海

連結器

保坂翔太

回峰行真似て小走り枯木山
 連結器軋む電車や寒き朝
 ぬひぐるみ離さぬ子ども冬の朝
 金婚のホテルのロビー緋絨毯
 古文書の読点おぼろ冬霞

草石蚕ちよろこ

梅澤輝翠

水平線広がり初むる初明り
 重箱の草石蚕の色にひとめぼれ
 葉牡丹のフリル賑はふ保育園
 ぽつぺんは色鮮やかやその音も
 泥団子小さき手にあり春隣

根魚

曲淵徹雄

ましぐらに芝蹴る蹄憂国忌
 冬めくや砥石を滑る鑿の音
 公園の裸像に絡む枯葉かな
 招くかに冬浪の音稚児ヶ淵
 つんつんと根魚の魚信寒日和

初富士

横山君夫

人気なき宝物殿に淑気満つ
 一天に浮く初富士を遥拝す
 筆先に寒さを乗せて追悼句
 母見舞ひ小さな嘘の寒さかな
 偕に老いともに祝ふや雑煮餅

冬の星

鈴木玲子

枯木立バーコードめく影をゆく
枯木立剃髪もまた風流かな
初夢を語るもともと覚束なし
成人式終へて晴着のスニーカー
輝けるとは自問自答す冬の星

春を待つ

渋谷きいち

様様なこと肝に銘じて去年今年
遠近法の摩崖仏淑気満つ
立山を背に寒鰯の網しぼる
掘り返す堆肥の熱や春を待つ
春待つや天地返し of 錆の鉄

祝詞

染谷風子

人ならば喜劇役者や河豚の顔
少年の気迫のトライ息白し
寒暁や前頭葉を一喝す
わが宿に待つ人のなき寒さかな
風花に祝詞を乗せて地鎮祭

冬菜

越田栄子

目が合うて首を傾げる寒雀
敷藁の温もりが好き寒雀
トランクに冬菜どつさり親心
朝穫りの冬菜色よく茹で上がる
ぎゅつぎゅつと青き色揉む冬菜漬

祝膳

河野はるみ

丸餅の赤白入り雑煮膳
甘味処の幟に惹かれ初弁天
祝膳脇に控へて初旬会
艶やかにさやかに披講初旬会
冬うらら悪友揃ひ喜寿祈願

冬を楽しむ

石田慶子

銭湯に長き列あり柚子湯の日
独り居の雑煮今年も夫の味
うろおぼえの名前答へて顔見世へ
寒雀おいでおいでよ吾が小庭
寒雀両手に包む缶コーヒ

冬日和 下川光子

白銀の丹頂熱く鳴き交す
釣人の視線の動く鴨の陣
冬うらら釣人の背まるくなり
石路の咲く路地も生家もひつそりと
墓守にならぬ娘二人冬日和

春着 石川理恵

お元日人入れ替はり立ち替はり
婚家とも里とも違ふ雑煮炊く
もう少し生きるつもりの雑煮食ふ
いく度も合せ鏡に見て春着
信号機の上へばさりと寒鴉

厳寒 野平美紗子

厳寒やめだかの動き鈍くなり
厳寒や日差し求めて草が伸ぶ
寒さ増し鳥影映す琵琶湖の面
寒鴉の声に目覚むる朝の床
買初や目移りばかりしてをりぬ

石垣みごと 野村美子

城跡に石垣みごと冬日和
厳寒や暗く切なき日本海
宗谷本線厳寒の駅稚内
冬晴や石垣島の砂きらり
冴ゆる夜の琴の調べや京町家

初明り 西幅公子

烈風に煽られ畑へ寒鴉
八丈島はや水仙の咲き始む
石室に色づき初むる桃の枝
鏡餅忘れてならぬ廁神
初明り息びつたりの盲導犬

飾り餅 田中章嘉

町中の祠に残る飾り餅
親と子が連風流す風を背に
焚上げの跡も幽かに初不動
福寿草スマホの中も芽吹き出し
物の芽に目盛を立てて観察す

福寿草 宮崎チアキ

好き同士縁を結ぶや福寿草
たちまちに空白埋まる新暦
初春や彩雲光る身延山
松過ぎのロビーに溢るる異国人
足萎ゆる友を訪ふ小正月

寒鴉 瀬戸雄二郎

よく見れば邪鬼無き眼寒鴉
生塵を頼りに生きて寒鴉
生きてゐる事が罪かも寒鴉
ごみに来るすれつからしや寒鴉
古巣にも七つ子居らず寒鴉

初神籤 葛城千世子

仏壇へ庭の赤黄の実千両
連写するダイヤモンドの初富士を
手繋ぎて長き石段初神籤
室の花面接官は夫と妻
試験終ゆ饒舌になる白セーター

初神籤 高橋満耶子

八十路坂よいしよよいしよと去年今年
鯛みくじの釣竿かろし初戎
初神籤おまけは干支の根付かな
いきなりの認知検査や初笑ひ
童心に戻りゲームや女正月

年改まる 寺内洋子

凶引きて盛り上がるなり初御籤
大当たり大凶引きし初御籤
願ひごとてんこ盛りして初詣
数の子や子ども三人孫ふたり
初夢やなぜか目尻に涙あと

新年一切 山戸美子

丸餅を見つけて語る里雑煮
師の賀状生き様込めて人生訓
老若の理由まちまち賀状じまひ
ふと語り壺にはまりて初笑
注連取りて塩撒き包む収集日

凍豆腐 森 和子

凍豆腐吊す戸毎の奥廂
嫁の座を五十数年凍豆腐
寒雷や漢方薬を一気飲み
噛み合はぬ三者面談鯉起こし
寒雷や夫の日課の四千歩

冬ぬくし 綿貫 ひさの

「真知子巻」通ずる仲の新年会
御先祖へ手合はす今朝の淑気かな
鶴頸に赤き一輪冬薔薇
平安の草子を想ふ寒昂
百二歳交じる筋トレ冬ぬくし

☆ ☆

俳句

4月号 予告

3月25日発売

予価 1,100円(本体1,000円)®

巻頭作品50句 池田澄子

作品21句 今瀬剛一・井上弘美

新時代俳句入門

俳句のほんとう

大きな誤解を解き俳句とは何かを改めて問う

▽俳句は高尚か

▽俳句とはどういうものか／何をどう詠むか

特別寄稿 マブソン青眼「オントロジーとしての俳句」

令和六年度 俳人協会賞各賞決定!

角川俳句賞作家の四季(春)……………若杉朋哉

新連載戦地へ征つて還らなかつた兵士たちの俳句…栗林浩

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

現代俳句鑑賞

網野月を

一月の杖に従う真夜真昼

宇多喜代子

〔俳句〕 1月号・梅の日より

「夜中」「真夜中」は言い慣わされているが、「真夜」と表記するのは新しいかも知れない。昨今は人物名にあつたりもする。他に「梅の日やおぼつかなくも二歩三歩」がある。

何？ という向きの変えかた初雀

池田澄子

〔俳句〕 1月号・何？より

「初雀」の可愛らしさが遺憾なく表現されている。こういう仕草をする人もいたりする。他に「征く勿れ殺める勿れ年新た」がある。

蠟八や剥落ひそと松の幹

古賀雪江

〔俳句界〕 1月号・冬鴨より

松の樹皮の裂溝は経年するとやがて鱗片状に剥がれ落ちる。上五の季語「蠟八」の意味が深い。他に「一つひにも言はず冬濤見たる夜は」がある。

神の眼は多く語らず能登時雨

対馬康子

〔俳句界〕 1月号年新たより

「何も語らず」という表現もあるのだが、作者は「多く語らず」とした。能登の時雨の様態にも酷似しているであろう。他に「ホッチキス針がぶれていたる雪」「ゆきずりの石もほとけも年新た」がある。

松竹梅飾り山家に客ある日

水田むつみ

〔俳句四季〕 1月号・松竹梅飾るより

「山家」とあるのだが然程辺鄙なところではないだろう。と想像した。多少自家への謙遜が入っているらしい。そしてその「山家」にも年賀の来客があるのである。客を招いたのかは不明である。飾りが招来したのかも知れない。

声にしてことばことだま草氷柱

岩永佐保

〔俳句四季〕 1月号・好日より

音声にして「ことば」は、はじめて「ことだま」を生じるものだ、と解釈した。座五の季語「草氷柱」が好もしく読める。

新緑やサムネに戦禍の無色の眼

安達昌代

〔俳句四季〕 1月号・無色の眼より

モノトーンのサムネであろうか。小さく映し出された幾多

の無垢な民の茫然自失した「無色の眼」をイメージした。他に「往診のポケットに鉛木の根明く」がある。

ドック前ここは終点冬雲雀 佐藤日和太

(俳壇 1月号・冬の記憶より)

人家近くまできた「冬雲雀」を作者は愛でている。高空を飛翔する春の雲雀とはことなる様態である。筆者は「ドック前」に函館を想起した。

入相の鐘のやすらぎ枇杷の花 川本育子

(俳壇 1月号・入相の鐘より)

昼の時間を終えようとする頃、晩祷の始まる合図ともなる晩鐘の響きに安らぎを覚えたというのである。初冬の花である「枇杷の花」が良く似合っている。眼下には石路の花、目の高さには八手の花、そして見上げれば枇杷が咲いている。そのスエードのような質感が特徴であり、初冬の「やすらぎ」に伍している。

大花野落としたままの鍵の束 Fよしと

(俳誌『ASYL』第8号・達磨の日より)

中七の「落したまま」が胆である。探しあぐねてそのままになっているのであるが、それらの鍵の必要な家の玄関の扉や庫の扉は開かぬままになってしまっているのであろうか。もしかししたら心の鍵とも考えられるのだが、「束」ではあるまい。他に「南蛮と一緒に下げる達磨の目」がある。

先生の綺麗に老いし冬隣 柏原空見

(句誌『や』1月号・夜の新鮮線より)

中七の「綺麗に老いし」は誰もが願うことである。座五の季語「冬隣」がリアルに過ぎて戦慄を覚える程である。他に「S字カーブ行くとび跳ねる栗の毬」「初雪や遠くに夜の新鮮線」がある。

われを去らず三月十一日の水 神田ひろみ

靴からクラリネットと薄の穂

冬あたたか日時計となるわが陰り

(句集『われを去らず』より)

「あとがき」に福島県相馬市の中村教会を訪ねて東日本大震災に遭遇した、とある。句集の題『われを去らず』はこの一句からとられている。二句目の「クラリネット」がなんとハイカラな響きを醸し出している。三句目は叙景句のような構えをしているが、実は心象句であると筆者は考える。そう読むと「わが陰り」の意味するところの奥深さを一層感じずにはいられない。

火の色に梯梧が咲かば沖繩忌 栗林 浩

(句集『あまねし』より)

座五の「沖繩忌」それだけで反戦の思いが伝わってくる。「咲かば」であるので、まだ咲いてはいないのだが、この句には有季とか無季などの議論は不要であろう。他に「民主主義焦がしてしまふ柳葉魚の尾」がある。

『水明誌』を繙く（水明二月号）

黒澤麻生子（『秋麗』同人）

ひっそりと城下を落つる鮎の影 五明 昇

ひそかに城を抜け出て落ち延びようとする武者の影、と
思いきや鮎の影。歴史小説の一場面のような緊迫感を漂わ
せているところが眼目の一句。この城を推察するに、木曾
川を望む要害に立つ犬山城ではないだろうか。尾張国と美
濃国の境にあり、別名「白帝城」とも呼ばれる美しい城。
室町時代の天文六（一五三七）年頃に織田信長の叔父・信
康が築城、後に信長・秀吉・家康がそれぞれの時代に犬山
城を手にしたことで天下人への道を切り開いた。まさに戦
国時代の舞台となり、様々なドラマを生んだ城なのである。
この鮎のように城を抜け出し木曾川を渡り、密書を運んだ
武士または忍者がいたに違いない。

さて、「鮎」といえば夏の季語であるが、掲句は「落鮎」、
秋の季語で詠まれた句ということになる。産卵のために下
流に下った鮎は、産卵を終えて、やがて死んでゆく。大き
な使命を果たした後に死を迎えるということもまた、武士
の美学と通じるのではないだろうか。城を巡る想像が様々
広がっていき、楽しませていただいた。

生きては般若死して観音白芙蓉 染谷風子

何という緊張感、凄い句に出会ってしまった。生きている
間は妬みや苦しみに満ちた般若のような面持ちだったが、死
に顔は観音菩薩のようであるという解釈で良いだろうか。白
芙蓉という季語が、色白の美しい女性を想像させる。そこか
ら江戸時代、吉原で働いていた遊女たちが口にしていたとい
う「生まれては苦海、死しては浄閑寺」を連想した。浄閑寺
は吉原の近くにある寺で、別名「投込寺」と呼ばれた。吉原
の遊女が亡くなると、荒筵に包まれて、この寺に投げ込まれ
たからである。どんな思いで生き、また死んでいったかを想
像するだけで胸が痛む。同じように対句法が用いられている
ものの、掲句のように最期が安らかであることは、せめても
の救いなのかもしれない。

生きること、死ぬことを真正面から詠むことは重く、難し
いものだ。それでも切実に詠まずにはいられない時があり、
詠むことで救われることもある。掲句はむしろ客観的に詠む
ことで、普遍性のある句となった。白芙蓉の残像が、深く心
に残る。

水明創刊 95 周年 記念特別作品募集

記念全国大会・記念祝賀会のご案内の通り、水明創刊 95 周年を記念して、下記の要領で俳句・エッセイ・評論の各部門の特別作品を募集いたします。

選考委員以外は何方でも応募できますので、奮ってご投稿下さい。
なお、受賞者の表彰は令和 7 年 9 月 28 日の記念全国大会にて行います。

応募要領

- 【応募資格】 選考委員を除く全ての水明会員。
- 【応募部門】 ①俳句作品：30 句（表題を付す）（応募用紙を発行所迄ご請求ください）
②エッセイ：1 篇（400 字詰原稿用紙 5 ～ 10 枚）
③評論：1 篇（400 字詰原稿用紙 15 ～ 20 枚）
◆①は応募用紙を使用。②③はタテ書き B 4 判 400 字詰原稿用紙を使用する
◆文字は楷書で丁寧に記す（鉛筆書きは不可、黒ペンを使用）。ワープロ、パソコンによる原稿も可
◆いずれも未発表作品に限る
◆最初のページの 1 行目に表題（タイトル）と氏名（俳号）を明記する
◆複数部門への応募も可
- 【応募締切】 令和 7 年 5 月 25 日
（令和 7 年 4 月 1 日から受付開始）
- 【送付先】 〒330-0064
さいたま市浦和区岸町 4 - 10 - 21 水明発行所宛
※「記念特別作品」と朱書する。
- 【選考委員】 主宰・副主宰・大村節代・石山かつ子・石井喜恵
◆選考委員各自の選考結果を基に厳正に協議し、受賞者を決定します。
- 【授賞】 俳句・エッセイ・評論各部門に授賞します。
正賞 1 名：賞状と副賞 5 万円
（但し、受賞に値する作品がない場合には該当なし）
準賞若干名：賞状と副賞 2 万円
（但し、受賞に値する作品がない場合には該当なし）

◎ご質問・お問い合わせ
実行委員長 網野月を（☎080-7580-0208）へ
お願いします。

水明創刊 95 周年記念事業 実行委員会

俳誌望見 梅澤輝翠

「鶴」

令和六年十一月号 通巻九五三号
主宰 鈴木しげを 発行所 国分寺市

一九三七年「馬酔木」の新人会機関誌「馬」と石橋辰之助の「樹水林」を合併する形で東京にて石田波郷を主宰として創刊。「有季定型を重んじる中で俳句韻文の精神を大切に、多くの仲間達と句作の座のたのしみを共有していきたい」をモットーとしている。

主宰句「玉虫拾ふ」十二句より

夕顔にこがれて男古りにけり
玉虫拾ふそんな日もあり歩くべし
檸檬にもかいがら虫や終戦日
橋詰の数珠玉に日の烈しさよ

茲にきて汗疹の秋というべしや
源氏物語の夕顔でしようか。源氏と夕顔の恋は成就された。しかし亡くなった夕顔にこがれて源氏は年をとってしまったという事。玉虫は「吉丁虫」とも書かれ縁起の良い虫とされている。美しい玉虫は「拾ひあげろ。そんな佳き日もあふと大切にしている日々に出会い拾ひあげろ。空を見上げしり」にも「なのであちこちの木についているのであろうか。さてどうしてくれようか。今日は終戦日である。歩いて来た橋のつぎる所まで、なんと数珠玉に秋というのに烈しい日が射していることよ。それも又美しくもある。秋だというに夏が続き今頃になって汗疹ができてしまった。暑い夏だった。飛鳥集より

はふはふと吹いて郡上の鮎を食ふ
うてなミヨ
富田 澄江

あづみ野の水湧くところ心太
白飯に魚の煮汁や終戦日
葛切に蜜たつぷりと子どもかな
約三五〇年の歴史を誇る稲庭うどんは角館武家屋敷の桜を愛でて絶品。郡上の四夜続けての徹夜踊り、そんな折の熱々の鮎は上品。わさび田の美しいあぶみ野で美しく。申し終戦日あの日は頂けなかつた白飯をありがたく頂く。申し終戦日のおかずは煮汁だけにしておきます。葛切は繊細な美しさをもつ。竹下夢二伊香保記念館の帰りに求めた葛切はなんとささく忘れられない味だった事か。食の句から楽しい発想をさせて頂きました。

そして最も感銘致しました自己を詠む「俳句の中心は吾」宮城新氏。自分自身を詠む際の留意点について考えてみたい。自分自身を詠んだ句と言えは、鶴を起こした石田波郷と、重要文精神をよりどころに切れ字、格調、リズムを全面に、重視したのは句の中心に「吾」を据える。自分を詠む際には、郷の句がよいテキストである。自己を詠む句では死、病、人生などを扱う事が多い。詠む際は主観性が勝つて、抒情的に流れやすいが次の句では表立つての主観性は抑えられて。石田波郷
バスを待ち大路の春をうたがはず
初蝶や吾が三十の袖袂
雁やのこるものみな美しき

一旬目上京して間もない昭和十二年頃の句、抒情的な「春をうたがはず」の措辞。二旬目は「鶴」に専念、初蝶との取り合わせが春の軽快さを伝える。三旬目は応召した時の句。死を覚悟して新たな境地の息づきを感じる。そして療養俳句の象徴する四旬目である。どの句にもリズム、格調共に波郷とし、他に「足袋つぐやノラともならず教師妻」杉田久女。「暁程な小さき人に生まれし」夏目漱石。「髭面に古稀刻みたり蜚汗」宮城新。本人の句で締めくくっておられます。まだまだ紹介したい句、文など盛り沢山で紙面の無さが残念。

山本鬼之介 選

水明集

語ること一目一目と編むセーター
重ね着を剥がされ昼の園児達
関東平野葱畝走る青青と
円窓はしぐれて色のなき季に
故郷の夜を統ぶるや冬銀河

さいたま 菅原真理

皆川更穂

茶の花や仔犬駆け抜けまた戻る
空山の裾のせせらぎ紅葉散る
三の酉夜通し響む手締めかな
初雪や轍のうねる裏通り
初雪の峰をせせるや大旭暉

世間雀を遣り過ごしけり浮寝鳥
手を振りて妻の駆け来る枯野原
年忘れ良き事だけを数へをり
ささやきは溜息となる聖夜かな
竹林の蕭蕭として時雨けり

さいたま 小林京子

ぎこちなき朱の木履や七五三祝
通勤の枯葉踏む音忙しなく
蒼天へ鶴唳発し翔び立てり
寛解の医師のひと言葉昂
シャンソンの余情にひたり冬の星

岡田宣子

校倉の切口ぬらす初時雨
初時雨錆びたる鉄の釘隠
軒下に薪整然と冬の雲
下校児の指差す先の帰り花
狂ひ咲きと言へどわづかに紅みせて

池田珪子

白煙太き地熱発電冬来る
葱洗ふきゆきゆつと白き素肌かな
絨緞に遥かなラピスラズリ色
絨毯に踏跡ねむる西洋館
読了の日付も愛し冬燈

越谷 阿部幸代

今生の再会ならず冬に入る
参道の足音乾き冬来る

凧や夫楯にして除けし日よ

半眼とぎらつく口と凧と

時雨きて濡るるが儘の遊具たち

さいたま 清水桂子

六本木のイルミネーション枯木星
寒暁や歩道に遊ぶ己が影

絨緞にまどろむ猫の夢ペルシヤ

紛争の中東から来緋の絨緞

深読みをさるる一言冬北斗

さいたま 飯田忠男

初時雨会ひたき人の名を書きぬ

ゆつくりとしたき余生よ初時雨

茶の花の花弁つまみて慈しむ

茶の花の中に道あり空もあり

裏道を金木犀の香に惹かれ

篠崎紀子

空つ風多胡の石碑を磨きけり
小春日や鉄鎖を伝ひ石門に

遙かなる補陀落照らす冬落暉

大根の農家直売道の駅

小春空紙飛行機の旋回す

反町 修

初時雨山門へ踏む階の苔

冬めくや湯気立ち昇る鍋のふた

瀬戸一望の寺閑かなり初紅葉

城跡の歩けば戦ぐ萩の花

菊膾俄に華やく厨水

寺町知子

暮の秋時間遅れの路線バス
檸檬の香流るるワルツシユトラウス

藪中に驚き誘ふ帰り花

酒匂川激流囀す富士嵐

枯野原晴夜の空に星座浮く

利根 倉田星歩

初雪ひらり粛粛として大鳥居

初雪や錦色にじむ迎賓館

冬の空青さの残る雲一筋

凍空やスキーリフトのきしむ音

冬の街号外の鈴けたたまし

霜多光代

霜月や譲り受けたる九谷焼
凧や悲しき鬼の奇譚聴く

数へ日やモカ珈琲をゆつくりと

実家解体庭に檸檬の実がひとつ

伊邪那岐の神話に浸る霜夜かな

平塚 丸屋詠子

平らかな冬耕の畑輝やけり
長身の銀杏黄金に空を染め
夕空に細枝くつきり枯銀杏
巻き戻す今日一日を蒲団かな
四次元のささやき聞こゆ枯木星

さいたま 山岸久美子

小春日の小町通りの愚かさよ
黄落や若き公暁をひそませて
綿虫や苔むす墓に一つの餉
返り花駆込み寺の小さき門
短日や紺一色の烏帽子岩

さいたま 本橋稀香

石庭の砂紋みだれぬ小春かな

伊奈 菅原卓郎

路地裏に在りし駄菓子屋冬夕焼

石関六弦

立冬の肌まだ青き竹矢来

こがらしに黙の夕餉の共白髪

薄縁に伸ぶる枯木のシルエツト

絵看板替はる名画座冬に入る

粉雪や日日増加するバスワード
年の瀬やお尋ね者のならぶ壁

寄鍋やぱつくり開く貝の口

さいたま 新 曆文

三の酉今年もコロナ貰ひけり
熊の子にミルク含ませマタギの児

森下山菜

満願の賽銭箱に散紅葉

冬の空蒼を切り裂く鳶の笛

風花や言葉少なき通夜の客

指細き美濃の深山の紙漉女
ラトビアの旅の始めに逢ふ夜火事
星屑を埋めて聖夜のかき氷

初恋の詩よ真つ赤な冬林檎

綿引まりこ

武蔵野の橋梁照らす冬の星

元田亮一

水鳥や空を飛ばんと羽根を打つ

置き去りの砂場のバケツ冬めきぬ

小春日の風と遊ぶや縄電車

凍つる夜や江戸の名残の七曲り

北風やスカイツリーの軋む夜
「あつたかいね」つぶやく君は冬林檎
塵埃の煌めき踊り冬あたたか
冬銀河廣田弘毅の胸の内

二筋の深き轍や薄氷
在りし日の繕ふ祖母の厚目貼
春浅し踏み入る畑の望みかな
ワンゴールわづかな春を掴みけり
紙雛煌めく帯の金の色

若狭 岡本祥子

地震揺する戸障子ずるる隙間風
枯葉舞ふイヴモンタンに酔うた街
今朝の冬三毛猫膝に乗つてくる
冬あたたか指しなやかな観世音
風情ともランプの宿の隙間風

さいたま 加藤でん治

口硬き馴染みの友や枇杷の花
山麓の終の棲家や落葉焚く
ふるまひに列長長と蟹まつり
岩を打ち散るや白波寒の海
寒鮒をさばく夫の手荒荒し

畠中八重子

おでん鍋先づははんぺんはふはふと
気忙しき師走我が動き緩慢
頑張らず最善尽くし年の暮
町医者の前庭にあり柊の花
主のなき古民家に白き山茶花

東京 畑宮栄子

冬夕焼「君をおきて」のリフレイン
暮早しオカリナを置き厨立つ
補聴器の慣れぬ残響日短
冬枯れの枝に残る実時待つや
綺羅装ふ社交ダンスの聖夜かな

さいたま 前田夏野

採血の腕の細さよ風寒し
侘しさも庭の風情よ枯芙蓉
おでん鍋寄り添ふ人のありてこそ
冬の雨喪中の便り息をのむ
冬苺いのちのいろをしたたかに

杉戸 佐々木史女

吾に寄る母の化身か冬の蝶
四万十の沈下橋にも夕時雨
冬の窓みんな笑顔の御食ひ初め
奈良公園になほも数多や冬の鹿
重ね着や築二百年梁太き

森下美智枝

遠き日や冬田で遊ぶ帰り道
冬田道沈む太陽あかあかと
ふぐ刺や青き大皿飾る白
拝札や富士の頂き初日の出
黙礼で交はす言葉の冬葬儀

さいたま 千坂平通

皿に添ふ焼塩うまし衣被
障子戸や影絵樂しむ昔あり
目立たねど芯の強い子枇杷の花
豪快に河豚の刺身を掬ひとる
大波のうねり果てなし冬の海

若狭 山崎郁子

深爪やそつと蹴散らす柿落葉
山の木々もののかたちに柿落葉
手作りの縞の綿入れ受験生
ゆく途に富士塚あまた神の旅
古家の窓のしつらひ柿落葉

川口 新井のり子

雪搔きや今日の遅刻はご勘弁
雪搔けど搔けど降り積む雪地獄
もて余す膨らむ腹や松の内
透き通る由良の川面や河豚造り
熱爛を啜る漢のおちよほ口

松村笑風

冬晴は雲一つ無きこの空ぞ
冬晴の町は青青光るかな
冬晴の向かひの席にゆとりあり
漱石と歩むがごとく冬日和
漱石や寿司屋の見ゆる冬の暮

さいたま 吉川拓真

小さんなら銚子の後の走り蕎麦
みちのくの旅へ愛車の冬用意
いち早くもみづる鳶のワイン蔵
犬の声ときをり漏るる鳶館
貼紙に仔犬の写真神の留守

さいたま 森美枝子

石露の花空の青さに負けぬやう
曲芸に客の笑顔や冬桜
花八手地味で丈夫な夫在りて
冬薔薇甘え教へぬ芸の道
年の瀬やゆり根こんにやく黒豆か

川島夕峰

厳格な漢の美学花吹雪
葉を食ふも喰はぬも自由桜餅
梅薫る築百年の豪農家
花吹雪山懐の無人駅
切株に咲きて一寸梅の花

香田裕誌

吾が予定もてあそぶごと朝時雨
時雨るるや売出し中の白い家
巣立つ子を窓より送る神無月
手袋の五指で興ずる女学生
十までを指折り数へ袖子の風呂呂

竹澤和子

主婦の知恵余り野菜を浅漬に
歌謡ショー紅葉に負けぬ厚化粧
半世紀ぶりに日の目をペアーセーター
袖直しなほ愛着のセーター着る
断捨離を終へてつくづく冬銀河

さいたま 小川洋子

年ごとに手間省きをり年用意
割りきれぬ気持抱へて寒夜かな
夕暮れの寒気纏ひて速達来
年の暮ガラス磨きの空薄し
厳寒や連山の巖深く見ゆ

さいたま 小山あつ子

空耳や軒にまつ赤な帰り花
ラヂオからカーペンターズ小夜時雨
昼の月仰ぎ無垢なる日記買ふ
天恵や颯横切り五七五
玉留めの糸を均して年の暮

大阪 遠藤人美

平野 楽

行く秋や灯台の立つ岬に来
逝く秋や鳥鳥うたふ鎮魂歌
デバ地下に揃ふ新酒の招き人
初時雨半袖シャツの異邦人
銀色のスパンコールの柳葉魚かな

冬帽子聴音棒の検査員

さいたま 石井直子

吉川 杉浦千祐

煤払父の書棚に「金瓶梅」
探しもの三つ出てくる歳の暮
セーターを後ろ前に着て日の暮れぬ
挽き立ての胡椒かをりぬ今朝の冬

冬の蝶地に落ちてなほ青き翅

秋谷風舎

さいたま 小駒さち子

紅をさす早起き婦人冬薔薇
情熱は歳では褪めぬ返り花
鞆音の乾きてせはし冬林檎
側近はよくよく選べ冬構

木枯や踊り舞ひ散る赤黄色
お日さまの溢るる山の蜜柑かな
短日や夕焼チャイム四時に鳴り
鶴舞ふも湿原駅に停車せず
上を向き寄り添ふ鶴よ永遠に

数へ日や志ん朝で聴く「芝浜」は
茶の花や農家の土間のフェルメール
そぞろ寒敬語使へぬアナウンサー
小春日や子へのラインにすぐ「既読」
老医師の白衣にミッキー小春かな

さいたま

田中弘子

聞き森篝火纏ふ里神楽
捕獲さる熊の子暴れ母を呼ぶ
頂上の微かに揺るる霧水かな
玄関を出でつ戻りつ今朝の冬
山茶花や夜道に浮かぶ白さかな

さいたま

播磨 進

都鳥忙しくつつく三番瀬
瀬をつつく長き嘴都鳥
札所より地囀り行く枯野道
絶景を股のぞきする冬うらら
軒先に行儀良く吊る蜂屋柿

木谷葉子

何処から訪ね来たるや柿落葉
夜祭は神の旅出の宴なり
渋皮煮作りて祖母をなつかしむ
柿落葉まだ掃き寄せる程もなし
枝に一つ残して離る柿落葉

川口

田村福美

杉木立抜けてまばゆき枯野かな
枯野から枯野へ疾うと千曲川
鳴き声の腹まで響く都鳥
都鳥泣きてはき出したることも
黄の少し透きとほりたる帰り花

今西 操

もう一度青春します帰り花
どこへ行く木彫り円空初時雨
冬浅し下駄音鳴らし湯屋帰り
神無しといふひと月うまく生きて見よ
アンコール期待に応へ帰り花

さいたま

門真宏治

数分間のおとぎの国や冬夕焼
住み慣れし街惚れ直す冬夕焼
冬茜使ひの夫の帰り待つ
旧友ら辿り着きたる冬桜
寒桜地藏二人の道標

緒方みき子

氷片を睨む秋刀魚の黒目かな
こぼれ落つる母の記憶や銀木犀
深秋や母の墓前に小花咲く
替へ靴は祖父が持つなり七五三
二股の大根引くや夕間暮れ

阿部貞代

雲速く流るる朝や冬仕度

さいたま 穴戸洋子

和歌山 嶋田洋子

木洩れ日に二輪より添ふ帰り花
霜晴れや畑にあまたの土竜塚
起き抜けのしむる奥歯や霜真白
着ぶくれてかけ込む朝の収集車

主待つ凜と茶室の白南天
片方の手袋探す日暮どき
冬うらら辻の地蔵も垂れ目なる
新妻の慣れぬ手付や年越しそば
うかうかと過ぎにし日々や十二月

大仏の半眼潤む冬夕焼

所沢 飯室夏江

上尾 室井早都子

冬夕焼一方的に切る電話
登山家の帰りを待つ碑冬桜
散り際を見ぬふりをして冬桜
古暦らくがき壁にはみ出して

彼の人のその後は聞かず神の留守
両の手に鈴緒の緩び神の留守
役名で訃報はらりと散る枯葉
冬晴の残像確と赤城山
減便を報らすバス停帰り花

海光の踊り子号は蜜柑の香

さいたま 横山礼子

さいたま 大熊健司

背伸びして天辺に星聖夜かな
短日や役所病院駅銀行
短日や下校の子らの長き影
ヒマラヤの青き嶺越す鶴白し

島人の小さき教会蔦紅葉
戲言に本音も少しおでん酒
大枯野白寿の母の杖使ひ
路地照らす裸電球霜の夜
明日畳むカフェに賑はひポインセチア

行く秋や見上ぐればただ空の青

伊藤美津子

鈴木香音子

初時雨ひとり病臥の昼下り
誰もみな優しく見ゆる小春かな
餌を探す水鳥長き首傾げ
小春日やばかりと浮かぶ無人島

ふゆざるる空き家をおほふ朝の靄
蕎麦刈りや組まれて苗の紅さかな
手を引かれ登る石段冬眺
かくれんぼ潜む毛布の寝息かな
冬銀河こぐ足軽き家路かな

短日の入り輝く与野の街
深呼吸冬至朝日につつまれて
駅ピアノデビュー目指せしクリスマス
渾身の「第九」響けよ彼の地まで
幾度も試練乗り越え冬の海

さいたま 稲野幸子

空に月湯に柚子ぽかり身のひとつ
ささくれも節の痛みも冬至風呂
まろき湯気胸深々と柚子湯かな
還暦の同窓会や寒桜
シベリアを吹きし風来て冬桜

東京 山中いちい

ぬかづけに靴思ふ母の指
木枯や停車のバスを追ひ越して
みかん狩海下に見て舟一艘
城ヶ島海荒れて雨白秋忌
くず湯溶く小さき匙の丸みかな

駒谷行雄

客待ちの船や揺蕩ふ都鳥
おにぎりや枯野を渡る雲の影
日の差して鳥の声する枯野かな
日当りの鳩丸々と実南天
手作りのコロツケ熱し火事見舞

さいたま 三浦真由美

山茶花や史跡巡りの婦人達
山茶花や庭にぎれ合ふ主と犬
つり橋の四方の景色冬紅葉
老の身の先は未知なり冬紅葉
待ちぼうけ雷門に小夜時雨

武田重子

掌に触れて潮騒桜貝
響く声刺さる言の葉卒業歌
春の街吐息の色 ワンピース
厚いパン三角に切る春の朝
水差に春水とろり飲みにけり

所沢 関根千恵

耳遠き夫と並びて蕎麦を刈る
輪舞曲聴きパイ皮伸ばす小六月
露地急ぐ紅きつま皮一葉忌
諍ひの果ての沈黙蜜柑むく
冬銀河「じゃあね」と旅に俊太郎

羽島秀子

石の上亀は動じず時雨受く
池の面を埋め尽くす蓮時雨浴ぶ
銀色の飛行機飲み込む颯雲
ふぐ供養碑の脇に咲く冬桜
クレーンの見下ろす街は師走入り

東京 深沢りこ

ビルの狭間に佇立て啜るおでん酒
山茶花に潜りて散らす小さき鳥
山眠る鳥居の赤き稲荷さん
ぢいちやんの秘密の場所よ茸狩
七五三今日の私はお姫さま

さいたま 湯浅 和

愛犬を落葉バックにスマホ撮り
冬の空波の如き雲へりの飛ぶ
冬夕日吾が足影の超ロング
かさかさと落葉散り敷く道歩む
くるくると舞ひ落つる木の葉ペアダンス

東京 大島千恵

秋日和被団協へと平和賞
重ね着の母ふつくらと割烹着
妹と心融け合ふ暮の秋
上州の落暉葱畑果てしなく
掘りたての葱一抱へ香り立つ

宮代 関谷多美子

てつぺんに鴉の巢抱く枯木立
枯木山岩の素肌は黄土色
三姉妹の石けり遊び冬ぬくし
冬の日や頬赤くして鬼ごっこ
枯蓮の狭間に鯉のぎよる目かな

さいたま 鈴木藻好

地祭やでんと供ふる朱の南瓜
蔓伸びし零余子の枯れて風揺らす
明の春床の掛物番鶴
被団協冬のオスロへ鶴舞ひぬ
年の暮タクシー待たせレジ急ぐ

さいたま 糸井しるく

村営バスに乗客ひとり大枯野
兵宮の屋根に霜おく国境
夕日さす窓の絵ガラス冬館
冬晴や女ひとりの山の辺路
着ぶくれて居並ぶ突堤太公望

石黒由美子

黒豆をまた見つめをり年用意
満身の燃ゆるがごとし冬紅葉
深閑の森に柏手神の留守
背にやさし十一月の日和かな
敷きつめし銀杏落葉の道柔し

東京 柳父はる

槽に居る亀の動きや冬うらら
冬紅葉人それぞれに個性有り
北風を受けしペタルや後もどり
忘年会猪料理並ぶなり

和歌山 南條さわゑ

冬晴や緑青色の騎馬の像

和歌山 樋口元美

転げ落つるみかんは甘し伊豆の山
ヨガの伸び猫になりたや冬の朝
連日の買出しメモや年用意

曇り空小さき赤き冬そうび

鬼石 榊原聰子

フロントの霜よけキルトブルー系
重ね着にさらに重ねるくらしかな
冬のはへ弱々しくもやがて逃げ

枯はちす弁天の青浮き上がり

さいたま 小田三茅

俯きてそろそろ出番蓮の骨
深田掘る大好物の蓮根かな
乾風吹くピルの谷間を急ぎ足

虎落笛師の一言に癒されて

落合和枝

虎落笛神の名高し敬礼を
村人や農業祭に虎落笛
友と旅肌も輝く柚子湯なり

だるま買ふ人それぞれの西の市

三森恵子

学舎に朝日差し込む冬の朝
裸木の空に向かひてなほ立ちて
年の暮黒豆つまむ父の顔

意気高く生を固持するいばむしり

さいたま 山下ユリ子

寒鯉の青きに透くる重たき緋
雪の富士高層マンション裾に置く
六地藏供花の乾びしそぞろ寒

友来たる苦楽を語る年の暮

藤沢 小島喜代子

江ノ電の線路の軋み冬到来
トンネルを抜ければ波立つ冬の海
母眠る紅苺椿ぼとり

初時雨句会仲間の幸祈る

さいたま 榎本道代

初しぐれ病超え弾くトロイメライ
輝ける句会の席や初時雨
酒進む炙り柳葉魚や五本箸

花やつで後ろ姿の夫無言

東京 中村まどか

雪灯り少しの迷ひ洗はれて
知り合ひが面倒になる雪の夜

作品鑑賞

山本鬼之介

円窓はしぐれて色のなき季に 菅原真理

円窓は、数寄屋造り・書院造りや茶室などに設けられたものが多く、やはり古都と言われる京都や鎌倉などの寺院に著名な円窓がある。京都市鷹峯（たかがみね）の源光庵にある「悟りの窓」、同市東福寺の塔頭寺院である芬陀院や光明院などにある円窓から初夏の新緑・秋の紅葉・冬の雪景色を観察する季節ごとの景観に心が浄化される。

さて、作者が見ている円窓は何処のものであろうか。前述のような有名な寺院のそれなのか、それとも一般的な茶室のものであろうか。何れにせよ、円窓の外には冷たい時雨が降っていて、少し前の秋の色合いが失せ、これから来年の芽吹きの時季までの灰色の季節の到来を思わせている。

「季」は「とき」と読むのであろうが、禅の世界にも通じる静謐さを漂わせた傑作である。

空山の裾のせせらぎ紅葉散る 皆川更穂

「空山」は普段聞き慣れない山の呼称で、説明無しにその山の様子が伝わってくるし、「せせらぎ」にかけての場所の設定が実に良い。淋し気な山の麓のせせらぎには、秋を謳歌したもみじ葉が次々と散って流れてゆき、それを追っている作者の眼が感じられる。秋の終わりと冬の到来が簡潔に詠まれている。

竹林の蕭蕭として時雨けり 小林京子

冬の淋しさと侘しさを言い表した俳句である。「蕭蕭」の二文字から、冬の竹林を吹き抜ける風と、間をおいて降る時雨が竹の葉を打つ音が聞こえてくる。何処かで眼にした景色なのであろうが、それをどう詠んだら自分の納得のゆく表現になるかを模索して「蕭蕭」に行き着いたのだと思う。まさに作者のお手柄と言つてよいだろう。

蒼天へ鶴唳発し翔び立てり 岡田宣子

日本に於ける鶴は、北海道東部の草原に居る留鳥の丹頂鶴と、鹿児島県の出水平野へ秋にシベリア方面から渡ってくる真名鶴と鍋鶴であるか、この句からは、北海道の雪原で鋭い声を発して求愛のダンスをしている丹頂鶴を思い浮かべる。純白の雪景色と蒼天の調和、そして紅一点を示す丹頂の首。やがて二羽の鶴が大空へ向けて鳴き交わし、大きく羽撃いて

飛び去ってゆく。

軒下に薪整然と冬の雲 池田瑠子

冬期は薪ストーブで暖を取る山荘風の家である。都会での生活に見切りをつけ、自然に恵まれた土地に移住して空き農家をリフォームして暮らしている家族を想像すると、この情景が見えてくる。製材所で不要になった半端な材木を安価で買い込み、丹念に薪割りして整えた薪である。一冬を乗り切るのであるからかなりの量だと思うが、「軒下に整然と」でその感じが詠まれている。本格的な冬を迎えて、どんよりとした雪催いの空である。

絨緞に遙かなラピスラズリ色 阿部幸代

この句から手織りのベルシャ絨緞を想像する。絨緞の青色で織られた模様の色を端的に表したのが「ラピスラズリ色」で、写真で見ると手織りのベルシャ絨緞と宝石のラピスラズリを見比べてみて深く頷いた。「遙かな」は、古い時代にラピスラズリから作った青色の顔料＝群青の産地アフガニスタンを連想させ、また、地中から湧き出してくるような深味のある青色の感じを言い表している。

風や夫楯にして除けし日よ 清水桂子

作者はいま凧に身を竦めて家路についている。踏みしめる一歩一歩から、数年前に、生存していた夫と一緒に凧の吹く道を歩いたことを想い出した。「あの時は、夫の後ろにまわって助かったなあ」と、懐かしさと淋しさが混在した気持ちになった。「夫楯にして」が深く結ばれていた夫婦愛を物語っている。

初時雨会ひたき人の名を書きぬ 篠崎紀子

「会ひたき人」は誰、「名を書きぬ」は何に、と興味をそそる俳句であるが、「初時雨」という情緒豊かな季語が作者の心を刺激して書かせたものかと思う。人は誰しも会いたい人は複数いるものだと思うが、その人の名を書くとすると、その数は自ずと限定される。初時雨の夜、居室の濡れた窓に、意中の人の名を指で書く。こんなことをしてみたいものだ。

初時雨山門へ踏む階の苔 寺町知子

石段を登ったところに山門のある古刹である。石段の数は見上げるほどは多くなく、せいぜい二三十段か、若しくは十段くらいかも知れない。石段は苔むしていて、その寺の歴史と格式を感じさせる。山門の中は、大伽藍ではなく、こじんまりとした本堂とそれに付随した建物のように感じる。何よりも山水の石庭が素晴らしく、本堂の縁に坐して侘寂の世

界を満喫することができる。

初雪ひらり肅肅として大鳥居 霜多光代

雪も大雪になると難渋するが、その年に初めて出会う初雪には、「よく来たね」と労いの言葉を掛けたくなるような趣がある。大社の鳥居を潜る時、はらはらと雪が降ってきた。

その雪は、作者のちよっぴり邪（よこしま）な心を正すようなタイミングで、心を引き締めて大鳥居を潜った。

絨緞にまどろむ猫のベルシャ 飯田忠男

冬の某日、高級なベルシャ絨緞に横たわりうとうとしていた猫。人間と同様に動物も夢を見るものか大いに興味を湧くことであるが、作者としてはその猫の顔つきを観察していて夢を見ていると信じたのである。アラビアンナイトに登場する美形の姫に抱かれている夢か。猫にかこつけて、実は作者自身が見たい夢なのである。

空つ風多胡の石碑を磨きけり 反町 修

「多胡」は、群馬県の旧郡名であり、奈良時代初期の和銅四年（七一一年）に上野国に多胡郡が誕生した際に建てられた多胡碑が、群馬県高崎市吉井町の多胡碑記念館に現存している。なお多胡碑は、山上碑・金井沢碑と合わせて上野三古

碑と称され、また、多胡碑は、那須国造碑（七〇〇年栃木県）多賀城碑（七六二年宮城県）とで日本三古碑と言われている。永年に亘り風雨に曝されてきた石碑の苛酷さと上州名物空つ風の逞しさが詠まれている。

檸檬の香流るるワルツシユトラウス 倉田星歩

作者の自宅での日常の一齣なのか、それとも、店のマスターが好みのクラシック曲を聴かせるレトロな喫茶店であろうか。生の檸檬を絞って紅茶に注ぎ、シユトラウスのワルツの名曲「美しき青きドナウ」か「ウイーンの森の物語」などを聴いているのであろう。檸檬の香りとともに至福の時が流れてゆく。

伊邪那岐の神話に浸る霜夜かな 丸屋詠子

高天原の神々に命じられて、女神・伊邪那美命と共に日本列島を造った男神・伊邪那岐命の神話を読んでいて、ロマン溢れる物語の展開に釘付けになってしまった作者なのである。「国生み神話」から「神生み神話」まで範囲が広がって時間の経つのを忘れてしまい、深々と夜が更けてゆく。外は満天に星の輝く霜夜であった。

平らかな冬耕の畑輝やけり 山岸久美子

冬耕は冬の田畑を鋤き返すことであるが、この俳句の場合
は、秋野菜の収穫後の畑を、二毛作や春野菜の耕作のために
鋤き起こしたり土壌改良するための客土を施すことである。
俳句の表現から察して、この畑は結構広い面積で、冬の陽が
豊かな土を輝かせている。食欲をそそる作物の実りの姿が見
えるようだ。

薄縁に伸ぶる枯木のシルエツト 菅原卓郎

日本家屋の廊下に敷かれている薄縁であろう。傾いた夕陽
によつて庭の木々の影が伸び、枯木までもが薄縁に座を占め
ている。家に家族が増えたような温みのある俳句である。

風花や言葉少なき通夜の客 新 曆文

通夜に参列するために葬儀場に来る人達である。当然のこ
とながら、皆神妙な顔つきで口をつぐんでいる。外は大分冷
え込み、珍しく風花が飛来した。恰も遠来の弔問者のように。

凍つる夜や江戸の名残の七曲り 綿引まりこ

京都のように碁盤の目のごとく規則的に道が整備されてい
る町は少なく、昔の畑や田圃の道がそのまま路地になつてい
るような住宅地が多いので、慣れないとよく道に迷うことに
なる。都市の再開発がなされなかつた江戸時代は、尚更であ

つたと思う。掲句がそれを上手く詠んでいる。くねくねと曲
がりくねっている道を歩いているうちに、思いもよらぬ所に
出たりして驚いた経験がある。代替わりしても家がそのまま
残っているような古くからの住宅地にこうした道が多い。以
前テレビで台東区根岸の探訪番組があり、この句の七曲りに
そっくりの道が映され、すごく惹かれてしまった。七曲りの
道筋には、時代がかった居酒屋や地ビールを飲ませる洒落た
ビヤホールがあり、一度訪ねてみたいと思つている。

返り花 駆込み寺の小さき門 本橋稀香

駆込み寺は縁切寺とも言い、鎌倉の東慶寺が識られている。
東慶寺は、明治時代まで寺格の高い尼寺であったが、明治
三十八年に僧寺になった。駆込み寺については、哀しい運命
の女性を救う寺として伝わっており、時代劇ドラマなどから
もその様子が想像できるが、「返り花」に作者の思いが込め
られているようにも受け取れる。

年の瀬やお尋ね者のならぶ壁 石関六弦

交番や街の要所要所に掲出された凶悪犯罪者の指名手配写
真である。如何にも凶悪な顔が並んでいる。「お尋ね者」と
言う簡潔な表現が実によい。江戸の世に還つた思いがする。

水琴窟

(水明集一月号鑑賞)

池田雅夫

秋草や川のほとりに水神碑

千坂平通

「水神」は水を司る神の総称で、庶民の生活には欠くことができない。「川のほとり」の水神様であるから農業、生活の基盤にしているのだらう。稔りの秋を迎えて作物の収穫が始まり、灌漑用の水もいらなくなった。「秋草や」に、自然に対する敬意と感謝の意が込められているような気がする。

里祭苗字ひといろ寄進帳

田中弘子

素朴で情緒豊かな村であろう。地方では一村の姓がみな同じところも珍しいことではない。秋の豊穣に感謝する「里祭」であり、その慶びを奇進に込めている。「寄進帳」にはずらりと名が記してある。「苗字ひといろ」の独創的な表現に魅せられた。「ひといろ」には「一種類」の意もある。

くずの花逆立ちしたる猫車

森美枝子

「くずの花」は秋の七草の一つであるが、どこへでも這い回るので農人にはやかいかいなもの。土砂などを運ぶ手押しの一輪車の「猫車」。「逆立ちしたる」であるから、古びて今は使われなくなった猫車に葛の蔓がからみついているのだ。

赤蜻蛉お地蔵様の手の上へ

小駒さち子

「赤蜻蛉」は秋を代表する昆虫で、農業国日本にとって郷愁を誘う最も身近な存在である。群をなし悠々と飛ぶものや道端などの突き出した枝に止まるものなど愛着がある。「お地蔵様」は、賽の河原で苦しむ子供を救うといわれる。「手の上へ」止まった赤蜻蛉は子供の化身にちがいない。

街道をダンブ疾走葛の花

石黒由美子

幹線道路を「疾走」する「ダンブ」。「街道」の土手の草木は、その風にあおられて葉を裏返し白くなびいている。一面にはびこる「葛の花」はダンブが通るたびに大きくうねる。その葉の下には、豆に似た紫紅色の花の房が現われる。普段は隠れて見えない花を疾走のダンブが見せてくれる。

辻説法に一瞬の黙稲光

大熊健司

布教活動の一つとして「辻説法」がある。道端で道ゆく人に法を説く。日常の暮らしをつらつらと。また御仏の有難い教えをかみくだいて説き聞かせる。佳境に入るころ、突然、「稲光」がした。その「一瞬」、民衆は「黙」したのだ。

連峰は薄墨色や秋徽雨 飯室夏江

「秋徽雨（あきついでり）」は「秋霖」とも書き、また、「しゅうりん」ともいう。じとじとと降り続く秋の長雨で、遠くの「連峰」がかすかに見えるほどに煙っているのだ。「薄墨色」の風情、ひびきが品格を与え幽玄の世界へ導いている。

秋灯を吸ひ込むやうに夜の雨 岡田芳春

「吸ひ込むやうに」措辞がいい。秋の雨、とくに夜の雨はいつそう寂しさがただよう。さらに「秋灯」のおちついて静かな感じを助長している。「秋灯」で詠むか、「秋の雨」で詠むかは作者次第である。秋灯には人を包む優しさがある。

紅萩の角曲がるまで見送れり 石井直子

昔は来客が帰るときには門に出て姿が見えなくなるまで見送ったが、現代はともすると、玄関のドアをボタンと閉めてお別れである。街の角に「紅萩」が咲いている。その「角を曲がるまで見送って」いる。ほほえましい光景である。

秋めきて樹々のさやぎも夕雲も 関谷多美子

倒置法といえるだろう。まず結論を述べ、そのあとに描写するとより力強く印象に残る。「さやぎ」はさやさやと揺れ動くことで、秋の気配は至るところにあることを教えている。

枝豆の莢山にして聞き上手 鈴木藻好

何があつたかは知らないが、差し向かいで一献交わしているのだろう。話に興じて酒の量も次第にふえてきた。熱く語る相手に相槌を打ち穏やかに聞いてやる。気がつけば「枝豆の莢」が「山」をつくるほどになっていた。よき酒である。

機縁あり迷悟の窓に鯛雲 大熊道郎

御仏の教えを受ける条件の「機縁あり」と言い切り、「迷悟の窓」と窓外の「鯛雲」を眺めながら仏教的に己の心情を詠んでいる。「迷悟」とは迷うことと悟ること。「万物みな我が師」と云われるように、自然界に心を映している。

秋風と共にふみ出す試歩の杖 榊原聰子

病気あるいは怪我が癒え、ようやく歩くことができるようになった。夏の盛りは外へ出ることさえ危険な暑さであったが、ようやく秋の気配を感じて歩く決心をした。「ふみ出す試歩の杖」に、快方に向かう明るい希望が現われている。

冬ぬくし妣を抱きたる里の山 関根千恵

「妣」は亡くなった母のこと。「妣を抱きたる里の山」であるから、里の山の一面に墳墓があるのだろう。里の山に抱かれて眠る妣。「冬ぬくし」がその悲しみを柔らげている。

大村節代 選

鼓
笛
集

二婆抜きのパバの居座る三が日

中七に毒ひそませて初句会

戯作者のとんびはたはた跨線橋

昼の月枯蓮吹かれひと色に

初時雨花の名札が滲みをり

朝の冬飛び跳ねてゐる膝小僧

つはぶきの花に照らされ遊女の碑

日だまりを独り占めかな干大根

寒茜闇増す街のシルエツト

森下山菜

寺町知子

阿部幸代

神棚の水清らかに年迎ふ

初夢の謎を語らふ朝餉かな

用心の歳となりたり雑煮餅

老いの坂見送る先に帰り花

師匠恋ふ落ちて色増す寒椿

冴返るノーベル平和被団協

温かき句友句縁の年忘れ

悲しみの隠し場所かな石路の花

野仏に異国のコイン春近し

開運を願ひ五勺の小豆粥

雪催ひエコー検査の部屋の闇

客招く日の薄化粧初鏡

丸屋詠子

新 曆文

綿引まりこ

清水桂子

一秒を刹那が繋ぐ去年今年
二百国それぞれのとき年始
神杉の巔に畏む初鴉

皆川更穂

次つぎにカヤツク海へ三が日
水仙の香や鎮魂の風そよぐ
年始め借景に見る富士高嶺

糸井しるく

古民家の格天井や吊し雛
揚げ雲雀少女の歌に添ひて鳴く
三陸の数の漁港や春愁ひ

香田裕誌

跡地には三十年の水仙花
初場所や軍配団扇輪島塗
大寒の剥けて真白なゆで玉子

樋口元美

冴ゆる夜の隣家の不在気にかかり
はたと止む母の軒や冬座敷
辻堂のこれ以上なき寒さかな

新井のり子

寒雷や朝のあいさつやんはり
花びら餅読経を急ぐ坊主かな
床の間に侘助のある茶室かな

山下ユリ子

御澄ましか味噌か議論の雑煮食ふ
熱燗の酔ひの勢ひ「第九」聴く
賀状きて思はず安堵友達者

倉田星歩

寄生木の自然調和や母の愛
冬暖や元気に泳ぐ稚魚増えし
寒き朝散歩の決意何処へやら

川島夕峰

本物は存外小さき福寿草
拍手の老若男女初景色
初雀ひなたにあそびかさこそと

石関六弦

四万十の流れ遮る寒の月
四万十の古城寒月くつきりと
花の雨四万十川の沈下橋

持永喜夫

去年今年逢ひたき人と再会す
初御空飛立つ娘に幸あれと
トロフィーの胸にずしりと初舞台

南條きわゑ

成人式振袖に風はなやかに
春夕べ口ほほばりて塾急ぐ
夕日さす木々の木末も春めきて

大島千恵

鼓笛集巻頭（二月号）

私の好きな一句（自句自解）

霜多光代

桐一葉坂ゆるやかに母の墓

小さな城下町の駅におりると街の中心へは坂をのぼる地形だった。「ゆうらん坂」と呼ばれるゆるやかな桜並木の坂の途中に墓はあった。ここから見る風景は穏やかに里が広がり、その遠方に谷川連峰が聳えていた。美しい光景である。現実には祖母の墓であるが母の想い出と共に大切な想い出である。

誤植訂正

二月号に誤植がありました。慎んでお詫び致します。

○二十頁下段

正 「はいー柳葉魚お待たせ」屋台酒

誤 「はいー柳葉魚はお待たせ」屋台酒

○百三頁二行目

正 大漁旗とともに母港^oに帰ってきた。

誤 大漁旗とともに母校^xに帰ってきた。

鼓笛集作品評

大村節代

中七に毒ひそませて初句会

森下山菜

一年の月の中でも正月は特におをつけて、お正月と称して特別な月と扱っている。そして、初年初めての句会を初句会と称して威儀を正して出かけるという。

掲句の中七の毒ひそませてが何とも面白い。新年早々に、分らないように、素直な句と見せかけて、中七の毒に句座の仲間に大受けする。作者会心の句会、よかったですね。

朝の冬飛び跳ねてる膝小僧

寺町知子

冬の朝ではなく、朝の冬が臨場感がある。朝の冬とは、夜明けから朝方、遅くとも午前中と期間がある。寒さの中に子供の元気な様が浮かび臨場感が迫る。

日だまりを独り占めかな干大根

阿部幸代

干大根、懸大根とは天日乾燥の丸のままの大根。野菜を干すと、ビタミン豊富となり、保存も利いて、現代では最高の食品であろう。

句集喝采

菅原卓郎

◆緒方純一「鳴 鳴」

ふらんす堂

著者略歴 1974年生。2018年「玉梓」入会。「玉梓」同人。俳人協会幹事。京都俳句作家協会幹事。古書店「全適堂」店主。

動物が大好きで奈良に移住した作者。理由は驢馬を飼うため、それまでは京都で山羊の「うしお君」を飼育していた。山羊の句が多く、本句集の第五章は主人公は凡て山羊である。

立春の音すべらせて左官鋤

柳絮飛ぶ空のやさしさうたがはず

炎帝に掴まれてゐし犀の角

闇手繰り寄せては払ふ踊かな

第一句、壁塗りの現場だろうか、まだまだ寒さは厳しいが鋤を滑らす音に春の胎動を感じる。職人の凜凜しい動きが見える。第四句、黒布頭巾の踊り手が亡者供養をする。鉦や太鼓に合わせて子供たちが続く。日本の秋である。

三枚に空おろされて稲光

秋薔薇の名前すなはち一行詩

冬立つと聞けば木立の畏まる

反芻の山羊かたはらに昼寝かな

第二句、薔薇の名は結構長い。特に秋咲きはロマンティックで曰くありげなネーミングが多い。下五の措辞は見事。第四句、作者が嘗て飼育していた山羊のうしお君との日々を詠んだ一句。山羊の絶えまない口の動きを横目に、のんびり昼寝の一駒。山羊と作者の至福のひと時である。

◆田口 武「煙 草」

朔出版

著者略歴 昭和二十九年生。高校時代に「歯車」入会。平成十年「銀化」創刊一号から入会。「歯車」同人。「銀化」同人。現代俳句協会会員。俳人協会会員。

高校生より半世紀に亘り句作に励んでおられる。身近な出来事を題材にした句が多く、作者も片意地を張らずに鑑賞して欲しいと述べている。煙草とは縁が切れならしい。

冬銀河ここが私の喫煙所

元日が白紙のやうに昏れてゆく

薔薇園の薔薇がとつても無愛想

陰膳に煙草を添へて春ともし

第二句、元日は朝からお神酒を頂戴し只々一日が正に白紙の様過ぎてゆく。新年の真つ新たな気持ち良く表れている。第四句、親しい友が亡くなったのであろう。仲間達と別れの宴を張る。手向けの煙草がやけに目に染みる。

案山子さへ昭和を忘れかけてゐる

胸倉を掴まれしごと寒波来る

鴨帰る鯉とは反りの合はぬまま

日向ぼこして年寄が板につく

第二句、齢を重ねると寒さが身に沁みる。その沁み方が胸倉を締め上げられる程の強烈さである。その通りである。第四句、本当は板になど付きたくはないが、こればかりは致し方無し。見た目も中身も年相応が肝要である。

網野月を選

山紫集

無愛想に無事問ふ子ゐて冬ぬくし

松井由紀子

冬ぬくし寝釈迦がそつと伸びをする

正木萬蝶

水溜めてパンクの修理冬ぬくし

遠藤人美

ソーラーのくまモン揺るる冬暖

小駒さち子

——以上特選

野良猫と呼ぶのは止めよ冬ぬくし

高橋満耶子

冬暖や「散歩行こう」と天の夫

武田重子

冬暖し山から熊の町巡り

田中章嘉

冬ぬくし写経の背筋まつすぐに

寺内洋子

冬ぬくし垂れ幕靡く埴輪展

寺町知子

冬暖親子四人の紀南旅

南條さわゑ

高らかに笑ふ婆たち冬ぬくし

西幅公子

雑踏のひとのほひや冬ぬくし

霜多光代

犬の尾のメトロノームや冬暖

池田雅夫

給水のコップ散乱冬あたたか

元田亮一

真つ直ぐに竈のけぶり冬ぬくし

渋谷きいち

冬暖の木立の守る札所かな

秋谷風舎

踏み石にまだ庭下駄が冬ぬくし

菅原真理

剪定の鉄のリズム冬ぬくし	野口 和子	冬ぬくし投込寺に荷風詩碑	丸山マスマ
医者帰りベンチで休む冬ぬくし	野村美子	太陽の席を設けて冬ぬくし	皆川更穂
冬暖まつたり過ごす温泉宿	畑宮栄子	冬暖や木葉の装ひいつまでも	宮崎チアキ
並足の馬場ひとめぐり冬ぬくし	原田秀子	冬ぬくしサンタに宛てて書く手紙	本橋稀香
冬暖かく歌ふ昭和ポップス	樋口元美	冬ぬくし胡坐の中に子が二人	森 和子
冬ぬくし絵筆の先に残る赤	日高道を	拭き上げし一枚ガラス冬ぬくし	森川義子
ふはふはの父のオムレツ冬温し	檜鼻ことは	基督二千二十五歳の冬暖か	森下山菜
冬あたたか妊婦自然に腹なでて	福田千春	冬ぬくき額縁庭園緋毛氈	森下美智枝
冬ぬくし電話の音が宙返り	保坂翔太	南向く西郷翁や冬ぬくし	森美枝子
冬ぬくし寺領の池を探る猫	曲淵徹雄	陽のあたる窓辺ぬくぬく冬ぬくし	山岸久美子
小綺麗に老いしカップル冬ぬくし	松宮保人	冬ぬくし六地藏に編む帽子	山下ユリ子
冬ぬくしこのまま旅に出てもよし	丸屋詠子	冬ぬくしフワフワな犬預りて	山戸美子

冬ぬくし森のものらは寝付かれず	山中いちい	捨てられぬファーストシューズ冬温し	石川理恵
冬ぬくし子に誉められてヴィサイン	湯浅 和	冬暖や太つた猫の走り来る	石関六弦
偕老の二人の朝餉冬ぬくし	横山君夫	冬暖にわか床屋の夫の熱	石田慶子
半袖とダウン手繋ぐ冬ぬくし	横山礼子	テラコッタの姫人形や冬ぬくし	糸井しるく
冬暖の朝はゆるキヤラみたくなる	吉川拓真	冬暖か榛名湖をゆく鳥の群れ	井上玲子
法要の木魚のロック冬ぬくし	綿引まりこ	公園を猫も散歩や冬ぬくし	上戸千津子
窓ガラス磨きに磨き冬温し	青木鶴城	手を上げよと輪ゴム鉄砲冬温し	内田恵子
冬ぬくし竹馬の友と長電話	新 曆文	冬ぬくし時化止みて見ゆ佐渡島	梅澤輝翠
リフォームのスーツで街へ冬ぬくし	阿部幸代	賜りしかな女の色紙冬ぬくき	梅澤佐江
夫婦てふ茶飲み友達冬ぬくし	荒井俱子	冬ぬくし垣根の隅に猫の道	大場順子
濡れ縁で干柿談義冬ぬくし	飯田忠男	ぴかぴかの指揮者の靴や冬ぬくし	岡田宣子
冬ぬくし席譲られて断らず	池田珪子	乳神の石の窪みや冬あたたか	加藤でん治

冬暖に尾をびちびちと稚魚五匹	川島夕峰	冬暖し出窓の猫やオブジェかな	嶋田洋子
冬ぬくしちよつと遠出の車椅子	熊倉千重子	ゆつたりとベンチのふたり冬ぬくし	清水桂子
冬ぬくし微睡誘ふワルツかな	倉田星歩	ぢぢばばの人形の笑み冬ぬくし	下川光子
傷む身に手と手が集ふ冬ぬくし	河野はるみ	閑伽桶の水の溢るる冬ぬくし	菅原卓郎
育休届出してバス停冬ぬくし	小林京子	冬ぬくし猫を待らせサンルーム	杉浦千祐
女子会の大谷談義冬ぬくし	小山あつ子	退院の日を朱書とす冬ぬくし	鈴木藻好
冬ぬくし雪乞ひ申す立烏帽子	近藤徹平	気の置けぬ旧友とゐて冬ぬくし	鈴木玲子
冬暖やホールは笑ひながらヨガ	榊原聰子	幼稚園お遊戯会よ冬ぬくし	関谷多美子
ドック終へぼつと息吐く冬暖	佐々木史女	車座で飲む缶コーヒー冬ぬくし	瀬戸雄二郎
再診は二年に一度冬ぬくし	笹本啓子	次郎吉の墓石の欠片冬ぬくし	染谷風子
墓前にてかすかな会話冬ぬくし	篠崎紀子	冬暖や埃被れるスキー板	反町 修
冬ぬくし想ひを紡ぐ叔母の文	篠原さよ子		

山紫集作品評

網野月を

雑踏のひとのほひや冬ぬくし

霜多光代

年末の雑踏を想起した。年末の人混みに作者はご自身の存在を知覚したのであろう。自己認証という言葉が昨今流行っているのだが、他者による認証ではなくて、自己が自己を知覚する、将にその景である。「にほひ」を感じているのは作者なのである。複数の人の「にほひ」ではあるが、一体、誰の「にほひ」なのかは句中に明示されていない。そうでありながら、中七の「ひとのほひ」がこの句の肝である。逆説的ではあるが、そうした説明不可能な句の運びが韻文なのである。

人間性への賛美という大袈裟になるが、人への信頼感と郷愁が表現されている。座五の季語「冬ぬくし」が句意を担保して充分である。

犬の尾のメトロノームや冬暖

池田雅夫

上五の「犬の尾」に「メトロノーム」のメタファを幹旋し

ている。つまり比喩的表現にしているのは筆者にとつては初見であった。しかも補完し合う構成で、「犬の尾」が「メトロノーム」に似ているのであろうが、「メトロノーム」を見ていると「犬の尾」のようだとも一割くらいは読める可能性を残している。筆者は以前メトロノームの針をピエロの指先に模した子供用のメトロノームを見たことがあるからなのである。上五と中七を「・の・」で繋げているのであるからやはり「犬の尾」が「メトロノーム」に似ているということであろう。季語がぴたりと納まっている。

給水のコップ散乱冬あたたか

元田亮一

冬季に盛んに各所で催されるマラソン大会や駅伝を想起した。先頭集団が駆け去った後の給水所のまわりも後続の集団が過ぎ行く給水所の近辺は、将に「コップ散乱」なのである。座五の季語「冬あたたか」は効果が大きい。季語そのものを選手へのエールを込めたような一句である。

真つ直ぐに竈のけぶり冬ぬくし

渋谷さいち

いまだき竈を堪能し楽しんでいるのは贅沢の極みかもしれない。もしかしたら旅先の光景でもあろうか。上五の措辞「真つ直ぐに」から風のない好日であることが推測される。真実、「冬ぬくし」なのである。

冬暖の木立の守る札所かな

秋谷風舎

叙景に徹した句作りである。独自に「守る」と見立てたところに作者の眼差しが感じられるところである。句意は「札所」を守る木立が「冬暖」だということである。「札所」は札所巡りのそれなのか、作者の住まう近隣の札所と呼び慣らされたそれなのかは定かではないのだが、作者の心持ちが察せられる句である。

踏み石にまだ庭下駄が冬ぬくし

菅原真理

中七の「：が」のあとには「残されている」が省略されている。座五に季語の「冬ぬくし」があるからと言って、「庭下駄」に履いていた人物のぬくもりが残っているという訳ではないだろう。庭下駄を履いて庭に出てみたくなるほど寒さが和らいである、と解釈した方が好きそうである。中七の「：が」のあとのリズムの作り出す間が絶妙である。

無愛想に無事問ふ子ゐて冬ぬくし

松井由紀子

子に対する愛情の横溢した句である。上五の「無愛想」は決してネガティブな表現ではなく、子の恥じらいを十二分に理解しての心境であり、そうした親子関係を全て呑み込んでいる心持ちなのである。中七の「無事問ふ子ゐて」がすべてである。「子ゐて」が喜びなのである。

冬ぬくし寝釈迦がそつと伸びをする

正木萬蝶

ファンタジーの世界である。作者の心の中の釈迦の姿なの

であろう。そうであっても決して頭の中の絵空事ではない。将にそれこそ俳句における季語の働きである。中七から座五への構文である「：が：を：」の散文的な言い回しが句意に合致していて巧妙に表現されている。その分だけ上五の季語「冬ぬくし」が効果的に働いているといつてよいであろう。

水溜めてパンクの修理冬ぬくし

遠藤人美

座五に季語「冬ぬくし」を置いて句の構成が定まっている。パンク修理に使う溜めた水の在り様に作者は冬の暖かさを感じたのである。「水を溜めパンクの修理」という書法もあるのだが、それでは中七が「パンクを修理」になるか、もしくは中七の後に「：をする」が省略されていることとなり、助詞の「を」が重なることになるので、本案通りが良いと考える。

ソーラーのくまモン揺るる冬暖

小駒さち子

心とむ「ソーラーのくまモン」である。いわゆる百均でも取り扱っているし、少々高級なヴァージョンもあるだろう。独り居の時や、まして暇を持て余している時、町医者の特合室や床屋の待ち時間にはその愛くるしい仕草に心和まされることがある。中七は「揺るる」と連体形になっているので、くまモンの踊りが「冬暖」をインスパイアしている風情である。「冬暖」の日差しの中で冬の愛日を受けながらのくまモンの踊りを見物しているのである。

新春俳句大会の記

青木鶴城

穏やかな天気となった一月三十一日の金曜日に浦和コミュニティーセンター第十三集会所に於いて、令和七年度の指導者及び幹事の会、新春俳句大会が開催されました。

午前中の指導者及び幹事の会には四十五名の参加があり、指導者及び幹事の役割、今年度の事業計画、コンプライアンス、九十五周年記念作品への応募呼びかけ等についての伝達と確認が行われました。

一方、新春俳句大会への出席は四九名、兼題の「寒の水」及び「福寿草」で作品を競いました。

選句

主宰は多選

副主宰は二〇句選

雪欄作家は十句選

一般は五句選

披講

青木鶴城

菅原卓郎

主宰詠

一の宮神馬の朝に寒の水

京舞を見据えてみたる福寿草

主宰選

三極(天・地・人)

天

母似とや寒の水張る洗面器

地

福寿草性善説の国に在り

人

寝返りできてやや子につこり福寿草

超特選

酒蔵の麴かきの香や寒の水

二八蕎麦縮むる技こそ寒の水

寒の水舐めて甚句の名調子

とどなき日の斑のゆらぎ寒の水

寒の水湯気立ち上る杜氏の手

決意とはしづかなるもの寒の水

寒の水心震はす笙の笛

特選

鈍色の丸薬三粒寒の水

寄せ植ゑの末広がりや福寿草

寒水や穢土も浄土もなひまぜに

篤姫の在りし日の部屋福寿草

福寿草置かれ陽気な居間となり

子らの歌響く分校福寿草

ひろこ

萬蝶

美智枝

輝翠

樂

延昭

徹雄

京子

かつ子

まりこ

義子

風舎

萬蝶

かつ子

由紀子

公子

寒水で薬七種を飲み干せり
 両の手で掬ふ息災寒の水
 里帰りまづ出迎への福寿草
 日だまりに夢二の猫と福寿草
 研ぎ澄ます刀身に注ぐ寒の水
 花入れの今朝の水替へ寒の水
 はらからの生家に円居福寿草

普通選

寒水や忍野に八つつ海満たす
 湧泉に葉告かたむけ寒の水
 寒の水含めばひとつ若返り
 寒の水くくりと動く喉仏
 友禅染の色際立てり寒の水
 待望の男の子誕生福寿草
 お互ひの白髪を笑ひ寒の水
 福寿草甘え上手の三毛の声
 地の光包みて優し福寿草
 利酒の大吟醸や寒の水
 にこやかに和顔施の如福寿草
 福寿草縁起良き名を賜はりて
 奥秩父山の日溜り福寿草
 固き土よけて二寸の福寿草
 床の間に射し込む朝陽福寿草
 深井戸の寒水父の病床に
 金色を放ち出窓の福寿草

美智枝
 鶴城
 輝翠
 佐江
 喜恵
 宣子
 修
 卓郎
 由紀子
 真理
 公子
 佐江
 義子
 翔太
 延昭
 喜恵
 栄子
 楽
 道
 美子
 桂子
 徹平
 久美子
 宣子

百歳の恋の道草福寿草
 背伸びする娘杜氏や寒の水
 福寿草久しく聞かぬ子沢山
 古書店のひと鉢の暖福寿草
 寒の水五臓六腑を浚ひけり
 金色を零す天日福寿草
 箱根山櫻を繋ぐ寒の水
 さらさらと杜氏の指先寒の水
 寒の水ほとりと垂らし出刃を研ぐ
 寒の水病の夫の喉仏
 福寿草喜びだけを記憶する
 紙漉きの痺れる手指寒の水
 しあはせも愛も黄色よ福寿草
 あるがまま生きて陽へ向く福寿草
 日の光補ふごとく福寿草
 寒の水骨の髓まで染み渡る
 寒の水汲みて八十路の背を正す
 寒の水蔵より漏るる仕込頃
 日だまりに地藏菩薩や福寿草
 三代の鰻の老舗福寿草
 一本の福寿草咲く家の庭
 寒水や巖を裂きて剪みをる
 福寿草しあはせ色つてこんな色
 初めての自転車楽し福寿草
 病む夫の柔らかな笑み福寿草

風子
 香音子
 和葉
 知子
 修
 徹雄
 更穂
 月香
 稀香
 慶子
 京子
 留美子
 はるみ
 紀子
 章嘉
 チアキ
 昇
 マスミ
 敏江
 ひさの
 三千子
 風舎
 宏治
 進
 まりこ

犇めきて金色となる福寿草
 福寿草百寿の母の猶盛ん
 互選及び主宰選の披講の後、天・地・人の
 三極には主宰より色紙、超特選には短冊が授
 与され、互選による高得点者には水明より記
 念品が贈られました。

高得点者

一位 石山 かつ子
 二位 梅澤 輝翠
 三位 平野 楽
 四位 正木 萬蝶
 五位 五明 昇
 六位 境 延昭
 七位 染谷 風子
 八位 丸山 マスミ

表彰の後、主宰より講評を頂き予定の時刻
 通りに終了しました。最近の大会においては
 初参加の方が増え、また入会後俳句歴の少な
 い人の活躍が目立ちます。

水明俳句会のさらなる活性化のため、皆様
 の参加がどんどん増えてほしいものです。

三極及び超特選の方、また、高得点を取ら
 れた皆様おめでとうございました。

ひろこ
 鶴城

『俳句』

令和七年 2025・2

還りくる春

山本鬼之介

〔水明・画〕

立春大吉たのもしきかな實母散
ミモザ咲き心の中をパリジェンヌ
論客に逆らふやうな春の雷
渡し場の舟還り来よ猫柳
船名の「丸」の謂れや春北斗
慎ましく句碑のぐるりをクロッカス
かつて愛犬掘りし小庭に春の霜
風光り県代表に相撲部が

『俳壇』

三月号

編集室の風景

「水明俳句会」編集部の活躍する発行所は、自前の発行所である。大村節代編集長はじめ石山かつ子氏、丸山マスマ氏、大塚茂子氏の四名が日夜詰めきりになって編集に取り組んでいる。

『水明』誌は毎月発行であるからプロの編集者並みの技量をもって編集に携わっているわけだ。発行所は昭和五十年以前からのもので、少々年季が入っているが、『水明』の精神的な中心地、文字通り「水明のメッカ」ともいふべきところである。高みからは創立者の長谷川かな女師がいつも見守っていて下さる。

網野月を記



水明例会

第一例会(浦和)

茂木和子
小林京子 報

その色香あやかりたくて初弁天
初弁天九鬼水軍の裔の島
沖鳴りの島に孤峰や初弁天
初弁天千疊敷は吹き曝し
沼面渡る風に光明初弁天
目標は三重跳びぞ初御空
芝居跳ね身の熱きまま恵方道
元日の社の池の跳魚かな
跳ね馬の猛るいななき初茜
顔見世や「孤忠信」宙を跳ぶ
初夢は天翔けて跳ぶ帆掛船
江の島や鳶が輪を書く初弁天
初弁天髻のをとこのケバブ売り
安芸の宮跳ぬる白波初弁天

由紀子
マスミ
卓郎
延昭
京子
和葉
拓真
卓郎
喜恵
稀香
徹平
延昭
チアキ

——以上特選

第二例会(東京)

山中みどり
青木鶴城 報

手毬跳ね沓脱き石の沓の上
冬晴れや棒高跳は天をつく
朝の陽を祠に受けて初弁天
初芝居跳ねし余韻や夫婦酒
ピアノ背に颯爽と行く初己かな
初弁天横書の絵馬数多あり
跳びまはる子の来て明し今朝の春
波に浮く鳥は光体初弁天
水仙の香り満ちたる茶室かな
植込の固き蕾や寒椿
食べごろの分かり易さや餅膨る
この星の処処にひび割れ鏡餅
やきもちてふことは思ひて寒雀
「話しかけないで」今餅食べてゐる
餅白に跳ぬる手水や返しの手

京子
順子
はるみ
マスミ
和葉
節代
由紀子
和子
サカエ
峰雄
鶴城

海苔黄粉砂糖醬油か餅を焼く
古への縄文人の餅の味
寒雀両手に包む缶コーヒー
日溜りの敷き葉に群るる寒雀
陽射し浴び小枝飛び交ふ寒雀
寒雀出窓の猫もまろまろと
供餅一寸ほどの願ひあり
寒雀主婦かしましき物価高
屋根の端に並び餌を待つ寒雀
田の日より夜の灯が好き寒雀

塗り箸へ餅の重さや雑煮椀
丸餅の雑煮に思ふ平和かな
雑煮食ぶ昭和百年祝ひつつ
沈金の鶴の舞ひたる雑煮椀

以上特選
垂弥子
士史
慶子
敏江
サカエ
千春
いちい
峰雄
みどり
鶴城
五木萬昇 報
正木萬蝶
ひろこ
鶴城
星歩
佐江



京人參の梅が一輪雑煮椀
雑煮祝ふ再嫁の味に早なじみ
借老の朝餉健やか雑煮餅

——以上特選

雑煮食ふ昭和平成令和生き
婚家とも里とも違ふ雑煮炊く
毎年よ雑煮餅焼くお役目は
健啖を語る借老雑煮餅

産土はるかいまや焼かずに雑煮餅
箱根路の駅伝見つ雑煮食ふ
とぐる巻くほどにのびたり雑煮餅

お雑煮や丸もち探し三軒目
独り居の雑煮今年も夫の味
復興を祈り掌に抱く雑煮椀
居住まひ正し交はず挨拶雑煮膳

松日影射す縁で焼く雑煮餅
農の祖に思ひを致す雑煮かな
雑煮餅用心しあふ歳となる
歳の数なんて無理です雑煮餅
入院の夫にも雑煮関東風

雑煮祝ふ輪島の椀の艶やかに
輪島塗に彼の地を偲ぶ雑煮椀

千春 萬蝶
昇

石井喜恵
反町修報

第四例会(浦和)

番台の消えし銭湯冬日和
冬晴や疎林の奥に雲ひとつ

延昭
由紀子

千春 萬蝶

——以上特選

康世

理恵

京子
徹雄
千祐
星歩
雅夫

はるみ
慶子
マスミ
佐江
ひろこ
順子
詠子
鶴城

千春 萬蝶

石井喜恵
反町修報

延昭
由紀子

千春 萬蝶

延昭
由紀子

冬日和み空を映す陶狸の眼
年玉の多寡をグラフ化する子かな
冬晴や富士を見たさの観覧車
年玉を妻にも包む我が傘寿
お年玉折るをためらふ津田梅子

寒晴れの日差の中を闊歩かな
お年玉受けたる子らの正座かな
冬晴や後ろ歩みの田圃道
お年玉デジタル通貨欲しと孫
冬晴や藁屋にすだく矮鶏の群れ
冬晴れの水音尖る綾瀬川
騎乗して鐘調節さうらら
英世より諭吉をねだるお年玉
鋭き声の樹樹渡り行く冬日和
冬うらら釣人の背のまるくなり
年玉や幼なにもらふ祝言言葉
冬晴や飛行機雲が消え残る
栄一と梅子に変わるお年玉
冬晴れや此処に座れと木のベンチ

——以上特選

玲子
でん治
行雄

寛治
恵子
翔太
マスミ
光子
由紀子
延昭
曆文
喜恵

梅澤佐江
河野はるみ

念入りに靴を磨きて初句会
越後路の午後はスカッと冬晴るる
澄まし顔じよよに解るる初句会
冬晴や丸き地球の見ゆる丘
言の葉も少し桃色初句会

初詣犬も衣装を改めて
冬天へ積み上げらるるドラマ缶
被災地の生存証明年賀状
松韻や子の腕を借り初詣
城濠を沸かす放水出初式
彼の人と出逢ふ若き日夢はじめ
手繋ぎて長き石段初神籤

——以上特選

千春 萬蝶

千祐

千世子

翔太

——以上特選

寛治

喜恵

玲子
でん治
行雄

寛治
恵子
翔太
マスミ
光子
由紀子
延昭
曆文
喜恵

梅澤佐江
河野はるみ

初詣犬も衣装を改めて
冬天へ積み上げらるるドラマ缶
被災地の生存証明年賀状
松韻や子の腕を借り初詣
城濠を沸かす放水出初式
彼の人と出逢ふ若き日夢はじめ
手繋ぎて長き石段初神籤

——以上特選

千春 萬蝶

千祐

千世子

水琴窟の音色澄みたる冬日和

——以上特選

初句会弾も足もてホームへと
冬晴や三婆揃ひ喜寿祈願
夜明前鉄路の音や初句会
富士を背に光る江ノ島冬日和
初句会より書き下す新ノート
生かされて卒寿となりぬ初句会
冬晴や富士冷朧と威を正し

——以上特選

玲子
でん治
行雄

寛治
恵子
翔太
マスミ
光子
由紀子
延昭
曆文
喜恵

梅澤佐江
河野はるみ

初詣犬も衣装を改めて
冬天へ積み上げらるるドラマ缶
被災地の生存証明年賀状
松韻や子の腕を借り初詣
城濠を沸かす放水出初式
彼の人と出逢ふ若き日夢はじめ
手繋ぎて長き石段初神籤

——以上特選

千春 萬蝶

千祐

千世子

佐江

——以上特選

千祐

知子

宣子
義子
玲子
佐江

人美

洋子
和子
千津子
早苗

——以上特選

洋子
人美
ノルン
千津子
和子
道子

——以上特選

千世子

鯛みくじの釣竿からし初戎
喜びを百万回も齒朶に告ぐ
モットーは早寝早起き初苗

満耶子
きわゑ
早苗

昔話あれこれ45

『大鏡』は紀伝体をとっている。

前回までは、忠平の五男師尹の家系の話であった。師尹の娘芳子の古今集暗記の話や敦明親王の東宮退位の話などがあつた。

右大臣師輔

今回は忠平の次男師輔の家の話である。師輔は九条殿と呼ばれ、大臣の位に十四年いたが、五十三歳で崩じた。『大鏡』は孫たちの将来を見届けずに亡くなったことをどんなにか残念であつたらうと同情している。しかし多くの子女に恵まれ、兼道、兼家、孫の道長が出て摂関家の祖となつた。

先ず安子。安子は村上天皇の中宮となり、冷泉・円融両帝の母として、太皇太后を追贈された。

安子土器の破片で芳子を打つ

安子はなかなか優れた人物であり、天皇も一目置かざるを得ないほどの人であつた。

しかし、なかなか嫉妬深い方でもあつた。

ある日、清涼殿の上の御局の、藤壺には芳子、弘徽殿には安子が上つていた。それを知つた安子は妬み心を抑えられず、二つの部屋の間壁に穴を開けて覗いてしまつた。芳子は噂通りの美貌であつた。「なるほどこの美貌だから帝に可愛がられるのだな」と納得したものの、怒りの気持ちを抑えられず、*間壁を破つてそこから土器の破片を芳子に向かって投げつけた。ちょうど帝が芳子の側におられて、こればかりは許せぬとご立腹になり、「こんな事は女には出来ない。伊尹、兼道、兼家などがやらせたに違いない。」と仰せられて、ちょうど殿上の間にいた三人に謹慎をお命じになつた。これを聞いた安子は、非常に腹を立て、帝に「何とひどい事をなさるのですか、

たとえ大逆の罪を犯したとしても、この三人をお赦しになるべきです。私の事でこんな処置をなされるのは、嘆かわしく辛いお仕打ちです。直ちに勅勘をお解き下さい。」と申し上げると、帝は「人聞きが悪い。今すぐ赦すことは出来ない。」と仰せになる。安子は「絶対に良くない事です。」と強く帝を責め申し上げる。「では、そうしよう」と部屋を出ようとなさるのを引き留めて、「今、ここで、三人をお召し返す旨をお出し下さい。」と強要する。帝は仕方なく直ちに職事を召して三人に参内するように勅命をお出しになつた。

* 清涼殿の間取りは時代によって変動があつたようだが、この二部屋が壁一重であつたとは考えられない。一般的な清涼殿の平面図であり、この二部屋の間には「萩の戸」という部屋がある。『大鏡』のフィクションであると言われている。

各地句会



珊瑚の会 (浦和)

溪流のぐいと曲がりし猫柳
 春待つや定刻びたりバス来たる
 富士湧水の膨らむ流れ猫柳
 待春の夢を谷に京和菓子
 我が部屋のレイアウト変へ春を待つ
 春を待つ散歩の杖の気ままなり
 綿飴のたとへば待春の色なりし
 口笛の寂しき音色猫柳
 この小川まだ飛べさうな春を待つ
 陽を受けて脱皮のやうな猫柳
 猫柳最初の一步赤子の歩

かつ子 喜恵
 マスミ
 恵子 光子
 史代 広子
 和子 和子
 和葉 節代
 知子 楽
 六弦

仏壇に父ひとりあり嫁が君
 嫁が君打出の小槌願ふ我
 初東風や両の手さすり散歩道
 初東風やワルツで明ける我が家かな
 初東風にSL発車秩父線
 初東風や飛び立ちさうな風見鶏
 初東風や固き蕾を震はせり
 牙ゆる夜や十九番は刺戟臭
 刺繍入りのスカートフ首に初句会
 賢きや牛に乗るとは嫁が君

尚己 妙志
 莊代 道嘉
 章嘉 美津子
 和子 月を
 はるみ 三茅

山茶花 (浦和)

初句会出席できる有難さ
 恙無さを言祝ぐ仲間初句会

美江子
 マスミ

若鮎句会 (浦和)

梵鐘の彩る響き初景色
 りんご飴持つ手に渡すお年玉
 年玉やかはゆい嫁が来てくれし
 年玉や蛇は虚空を永遠に見る
 山門に同床異夢の初景色
 母の頬にはかに赤み初山河
 アンカーの脚・脚・脚よ初景色
 あぜ道や燥いで落とすお年玉
 小さき手にこぼれる程のお年玉
 初景色彼方に光る新都心

香音子 芳春
 山菜 拓真
 真貴 秀子
 月を 喜夫
 稀香

きざきサークル (浦和)
 凍豆腐からから噴ふ嵐の夜
 湯治湯のランプの揺らぎ冬の雷
 突然に寝ばなを襲ふ冬の雷
 茶屋街の弁柄格子冬の雷
 凍豆腐里のたづきを語る夫
 寒雷を遠くに聞きつ立つ厨
 寒豆腐吊す戸毎の奥廂

昇 健司
 啓子 由美子
 俱子 和子

あゆみの会 (浦和)

雑煮餅みちのく訛り抜けぬ夫
 年新た靴ひもしかとまづ一步
 年新た結ぶみくじは跳ぶかまへ
 亡き夫の郷の雑煮を半世紀
 年一度お目見えとなる雑煮椀

俱子 啓子
 重子 藻好

和歌山水明句会 (和歌山)

深夜放送うつらうつらと去年今年
 散紅葉神木樹相あらはなる
 雪かぶる故里の山絵画めく
 室の花面接官は夫と妻
 八十路坂よいしよよいしよと去年今年
 初雀餌をたしかめに来る三羽
 成人式さなぎが蝶に変身す
 初風や鯛釣り舟のひしめける

和子 道子
 千枝子 千世子
 満耶子 千世子
 きわゑ 洋子
 廼代

青葉の会 (浦和)

冬晴や石垣島の砂さらり
桜島の噴煙あがり冬うらら
八丈島はや水仙の咲き始む
寒さ増し鳥影写す琵琶湖の面
急降下ネットくぐり抜け寒鴉
小春日や島の渡しに旅役者
重箱の草石蚕の色にひとめぼれ
厳寒の自販機の灯や缶コーヒー
佐渡島流刑の地にも春近し

神戸大池 (神戸)

七草の野山の香り乙な味
一心に息災を謝す初詣

小梅の会 (浦和)

オリオンを通り抜けたる最終便
雪だるま赤きポストと背比べ
飾り取れ終の棲家に母ひとり
初フルムーンと友よりライン霜夜かな
西空男峰女峰の初筑波

若狭水明会 (若狭)

扱ひは注意要するフグと妻
岩を打ち散るや白波寒の海

美子 美智枝 公子 美紗子 洋子 啓子 輝翠 和子 真理 千津子 早苗 隆文 隆然 恵子 道

生まれ来てただから生き切る年越蕎麦
女将には別の顔あり河豚の宿
時化空や漁師腕組む冬の浜
早朝の船出見送る冬の花
百までが今の目標河豚を食ふ
冬海に丸呑みされし沖の石
冬海喜怒哀楽を呑み込みし
冬海グレーのスーツ地味かしら
酔ひしれて語り明かして河豚の宿
鶴川山百合句会 (鶴川)
電飾を外せば只の枯木道
枯木立鋼のやうな芯を持ち
山枯るる保養所にある卓球台
枯木立父似の背が遠ざかる
葉隠れに実りし恋も枯木屋
やまひの話推しの話も日向ぼこ
足元に黄金敷きつむ枯銀杏
静寂を破りしカラス枯木立
銀河駆けるベガサス冬木立ぞして君
枯木立バーコードめく影をゆく

寛久 郁子 保人 祥子 初花 和風 友夏 雄二郎 史代 広子 千春 萬蝶 理恵 美千子 うさぎ まどか 玲子 行雄 公子 千恵

風牙ゆる駅ビルを撫で空を撫で
豪邸の庭に寒梅おくゆかし
イクメンが身につく息子寒紅梅
寒梅や家の移ろひ見守りて
この年の序章きりりと寒の梅
牙ゆる夜の琴の調べや京町屋
おほかみも青鮫もるて月牙ゆる
柿の木塾 (浦和)
竹刀振るをとこ片肌竜の玉
かな女句碑光さらさら日脚伸ぶ
深々と竜の玉抱く庭の隅
千年の神杉囲む竜の玉
傾ぎたる売家の札や竜の玉
日脚のぶバス停二つ歩きたり
芽吹句会 (浦和)
二千年背負ふ神木淑気満つ
会はねども賀状がつなく旧戦士
「洪沢」か「梅子」か迷ふお年玉
初春のみくじの吉よゆるく結ぶ
くつろぎの家族を結ぶ去年今年
好き同士縁を結ぶや福寿草
初旅や苔むすものに木の鳥居
幫間の襟足青し年迎ふ
正月や結城紬の男伊達

真理 久美子 美智枝 多美子 由紀子 美子 茂子 和葉 恵子 章嘉 かつ子 和子 玲子 修 富子 千重子 久美子 千アキ ひろこ 弘子 道

新樹の会 (浦和)

遠富士の頂光る寒日和
終列車上野の森の除夜の鐘
寒晴や異国情緒の港町
寒晴の鉄橋わたる「金太郎」
寒晴や湾の彼方に芙蓉峰
終電車話し上戸の新年会

りそな俳句会 (浦和)

新年の挨拶長し老の友
思ひがけぬ人が仲間如初句会
初詣子孫に残せ地の環境
シリウスは天頂にあり和を祈る
初富士や何か良き事ありさうな
復興に寄り添ふ誓ひ年新た
清澄の地に燦燦と初日かな

蘭の会 (浦和)

冬の朝カラス飛びかふ茜空
何もかもからりと晴れて冬の朝
手がそれて自由になりて手鞠かな
亡き祖母の一行らんばん手鞠唄
寒暁や前頭葉を一喝す
水仙の列なす垣根猫の径
倍速でペダル漕ぐ人冬の朝

道を
清吉
徹雄
風子
鶴城

寛治
久美子
建治郎
道を
マスマ
雅夫

三千子
寿夫
夕峰
留美子
風子
さよ子
小麦

箱根路へ襷重たし冬の朝
老二人雪積む夜の大根汁

寒暁の見入る者なき一里塚
冬の朝クラリネットに目覚めけり
湯の沸きで秒針響く冬の朝
冬の朝掃き清めたる禪の寺
野ばらの会 (浦和)

玉砂利を踏み来ると寒雀
ぎゆつぎゆつと青き色揉む冬菜漬
目一杯空気を羽織り冬雀
託せぬと母の自慢の冬菜畑
早朝の冬菜ざくりとみづみづし

芙蓉句会 (浦和)
生ひ立ちを語る老体おでん酒
梅の香の気配も少し初天神
丸餅を見つけて語る里雑煮

鏡餅忘れてならぬ廁神
水平線広がり初むる初明り
それなりに米寿授かり初明り
初明り八十路に夢の二つ三つ
初明りやがて満天染むるなり
独り居の斯くも小さき鏡餅

仲子
和子
風舎
月を
京子
まりこ

茂子
栄子
秀子
夏江
みき子
税子
仁子
美子

公子
輝翠
燈女
喜恵
チアキ
佐江

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

風花す旅の一座ののぼり旗
着膨れて狙ふ連番前後賞
着ぶくれの背に埋もる赤ん坊
猫ねまるポインセチアのある出窓
明日曇むカフェに賑はひポインセチア
初夢や目覚めて消ゆる秀作句
初夢の端に触れたる猫のひげ
風花やホームに啜るためき蕎麦

俳句の手ほどき (岩槻)
水温む泥鰌をどらす安来節
早春の光をまとひ帯祝
新年の宴たけなはを安来節
島は春波止場流るるおけさ節
じよんがら節の撥も軽やか春の声
凍て返るラインの魔女の呼ぶ声が
島人が煽る三線月おほろ

追憶のロシア民謡雪椿
春の日の三橋美智也のエルピー盤
春の宿湯けむりを浴び草津節
「佐渡おけさ」春日の海にたらひ舟
トロイカ溢るる歌声喫茶町は春
独り居に祝ひの電話年新た
春寒や別れに交はずお立ち酒

延昭
美枝子
早都子
俱子
由美子
洋子

延昭
佐江
義子
徹平
翔太
忠男
卓郎
桂子

幸代
久美子
美子
知子
チアキ
かつ子

櫛の会 (浦和)

風花舞ふ人の戻らぬ能登の街
初春や足るを知りたる暮し向き
芝居はね風花類に心地良し
風花のゆるりとくぐる大鳥居
初春や笑顔よちよち歩き初め
風花やひとり岬に佇つをんな

若楠句会 (浦和)

山の辺の万葉歌碑や仏の座
道すがらご利益給ふ仏の座
名にし負はば踏まないやうに仏の座
初霞赤き鳥居の見え隠れ
巖にて朝日待つや初霞
赤き色含みて硬し冬芽かな
神々の数多おはせど仏の座
ほとけの座好きな仏を選びをり

蛸の会 (浦和)

淑気満つ玉砂利踏みて前を見る
初買ひや狙ふ景品大外れ
水仙の絶景の果て岬かな
潮風に向かひ波立つ野水仙
コンサートの夢・愛・絆淑気満つ
淑気満つ紅白対の箸袋
煮凝りをつつき比叡を景にして

朋子 裕誌 富子 文子 あつ子 千重子 直子 葉子 京子 風舎 真由美 鶴城 宏治 さち子 ひさの 元子 幸子 風舎 秀子

艶競ふ景德鎮と蛸梅と
仙道のほのかに明る水仙花
急傾の石のきざはし淑気満つ
水仙や別れのことば口籠もる
皐月の会 (浦和)
冬苺自ら過去を云はぬ父
朱の橋の淑気を渡る朝末き
ひと切れのぶ厚き鮎を買ひにけり
様々な闇ざわざわと除夜の鐘
船縁に跳ぬる寒鯛大漁旗
自動車のライトに透くる雪女
水明湾つくし句会 (大阪)
銭湯の懐メロに酔ひ大晦日
常着てふ肌上添ふもの五日かな
数の子や子ども三人孫ふたり
円卓の会 (浦和)
葉牡丹やカーネル・サンダース笑ふ
葉牡丹よ職業欄に「主婦」はなし
刀工の砥石浄むる冬の水
冬の水釣り人一人影映す
泥団子小さき手にあり春隣
寒鳥駅のソバには百貨店
胼の手を合はす小路の妻社
芹摘めば瓜笑顔の母のこと

礼子 夏野 月を 宣子 山菜 光代 珪子 曆文 さいち 更穂 智恵子 人美 洋子 拓真 京子 翔太 亮一 輝翠 卓郎 道を

枯葉散る若き兵士の命散る
手の平で掬ふひととせ冬の水
ミモザの会 (横浜)
返答はいつもあひまひ蠶ぐもり
ノースайд互ひに讀ふラガーマン
うろおぼえの名前答へて顔見世へ
初夢を語るもとんと覚束ぬ
年を経て母に似てくる初鏡
初夢のなかで勤しむ句作かな
霜の夜の答に詰まるプロポーズ
初夢や問答無用斬られ役
初夢や天然色の母若し
水明熊谷句会 (熊谷)
古佛に古拙の笑みや冬の梅
花街をしのぶ縁や冬の梅
寒梅の何より映ゆる空の青
黒門に今朝も寄り添ふ寒の梅
寒梅をさして老女の押し車
冬深し妙趣の庭の美術館
咲き初めをきそろふ路地裏冬の梅
銘銘の皿のふぞろひ女正月
落語跳ね甘味繰り出す女正月
たかなな俳句会 (川口)
松の内少しの嘘をふたつほど

鶴城 史代 美千子 慶子 玲子 栄子 詠子 萬蝶 重弥子 千春 風子 秀子 道を 忠男 燈女 栄子 徹平 卓郎 茂子 のり子

ゆつくりと巡る寺町松の内
姿見を磨き上げての初鏡
日記帳書くこともなき松の内
若枝句会 (浦和)

順を追ひ人にも木にも初日さす
安寧を祈る初日の世界地図
齒染飾り夫婦で籠る初コロナ
足踏みて山の端眺み初日待つ
裏白の鈍く光るや朝の庭
山海の供物引き立つ齒染を添ふ
身延山難行苦行初日の出
水明鬼石句会 (鬼石)

冴ゆる月オペラに酔える帰り道
畳屋の深夜の明かり歳用意
太陽の光の中のふきのたう
りんどう俳句会 (浦和)

初富士の大きく見ゆる埼玉京線
一天に浮く初富士を遥拝す
うづくまる蹠蹠の辺の寒さかな
成人の日祝ふ蔵元親子鷹
隔離され一人食事の部屋寒し
初富士に舐先晴れやか相模灘
初富士の両の手吾を包みけり
風花に祝詞を乗せて地鎮祭
独り居の間はず語りの寒さかな

卓風 徹夕 翔順 君寛 和聰 泰貞 鶴小 義
郎子 雄峰 太子 夫治 ナオ子 美佐子 敏江 みどり 貞代 生 城 麦子

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

[指導者] 網野月を [作品] 5句 [受講料] 1,000円
[方法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③110円切手を同封 ④返信用封筒は不要 ⑤締切なしで随時受付
[送付先] 網野月を 電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸 1-31-2

特集 気候変動と俳句

川幡穂高 (古気候学者)
池田瑠那 / 神谷章夫 / 瀬戸優理子
西池冬扇 / 西村麒麟 / 山下知津子

※好評連載
成瀬政博
とりあえずの日々

人と作品
田島和生句集『暁紅』
中山和子句集『勾玉』

俳号の履歴書

町田無鹿
マブソン青眼

※巻頭三句

恩田侑布子 / 波戸岡旭
武藤紀子 / 山本鬼之介
山田貴世 / 橋本直

※今月の筆

小野あらた / 山崎祐子

※俳句と短歌の10作競演
飯屋賢一 / 田中翠香

青木亮人
忘れ得ぬ俳人と秀句
俳人の響き

大西朋
俳句のまなざし

井上泰至
俳句の語源

イメージ辞典

神作研一
てのひらの江戸

藤村公洋
古典籍を旅する

俳句のつまみ

秘矢まりえ
諸家書架

二ノ宮一雄
一望百里

Haiku Shiki

俳句四季

2025年4月号

3月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

水明創刊 95 周年 記念特別企画

水明創刊 95 周年を記念して、記念特別作品を以下の要領で企画しました。全ての誌友・同人・季音同人の投句をお願いします。9月・10月合併号に掲載する予定です。

投句要領

【兼題】 「水」 「明」

※詠み込み・通季（春・夏・秋・冬・新年いずれも可）
で一句ずつ

【締切】 7月25日

※投句用紙は6月号に添付します。

水明創刊 95 周年記念事業 実行委員会

水明創刊 95 周年 記念祝賀会・全国大会のお知らせ

■記念全国大会

日 時 令和7年9月28日（日曜日）
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
〒330-0062 さいたま市浦和区仲町2-5-1
行 事 ・水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞、鼓笛賞、山紫賞の表彰
・季音昇欄同人、新季音同人、新同人への委嘱状授与
・大会記念作品の表彰（俳句、評論、エッセイ）
・大会兼題句の入選発表、表彰、講評

■記念祝賀会

日 時 令和7年9月28日（日曜日）
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
〒330-0062 さいたま市浦和区仲町2-5-1
行 事 ・来賓挨拶（高野ムツオ現代俳句協会会長）他
・アトラクション他

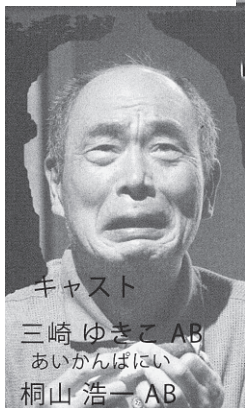
※大会・懇親会の時間および参加費等の詳細については改めてご案内致します。

「春の吟行会」のご案内

- 【日 時】** 令和7年3月30日(日)
10時～10時30分 受付(投句用短冊・案内配布)
10時～12時30分 吟行
12時30分 投句締切
12時30分～13時20分 昼食
- 【会 場】** 本所地域プラザ BIG SHIP
東京都墨田区本所1丁目13番4号
電話 03-6658-4601
- 【投 句】** 当日の囀目(当季)2句
- 【会 費】** 2,000円(昼食・飲み物の用意があります)
- 【申 込】** 3月21日(金)迄に添付の申込書に会費を添えて
発行所総務部宛にお申込みください。
※会場には10時から入れます。
- 【吟行場所】** ○隅田川 ○両国周辺 ○安田庭園(無料)
○横網町公園(東京都慰霊堂) ○下町散策など
春の隅田川の風情、隅田川に架かる名橋の趣き、
各吟行地の桜をお楽しみください。
- 【アクセス】** ○JR御徒町北口下車→東京都バス(錦糸町行き)
本所1丁目下車→バス停より1分で会場
○都営浅草線・大江戸線「蔵前」駅より徒歩8分
○東京メトロ「浅草」駅より徒歩12分
☆大勢の方のご参加をお待ちしております。

主担当 第二例会、支援 事業部

2021年度 池袋演劇祭 優秀賞受賞作品



キャスト

三崎 ゆきこ AB
あいかんぱにい
桐山 浩一 AB

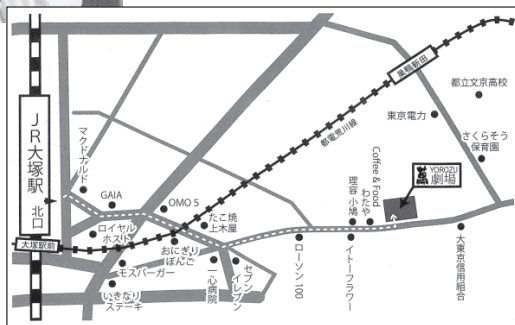
水明会員の桐山浩一（遊童）さんが、人情喜劇に出演します。役どころは、どさ回りで苦労している「昭和の歌姫」を再び世に出すのに力を尽くす年金爺さんです。皆さんを泣かせ、そして、笑わせます。よろしければぜひ観てください。

山本鬼之介

観てください

昭和歌姫 明美ちゃん物語

咲きそこね さして 散りそびれ



チケットのご予約 ————— ★電話 090-4912-3354

2025年 4月2日[水]～4月7日[月]

2日 水 3日 木 4日 金 5日 土 6日 日 7日 月

風 声

○俳句四季二月号——「季語を詠む」欄

クレソン残し乙な女のひとり客

鬼之介

○現代俳句一月号——「列島春秋」欄

寒禽葬るからくれなるの花の樹下

大橋 迪代

○現代俳句一月号——「第一回現代俳句『風を詠む』」欄

古障子に穴暗空に天王星

菊池ひろ子

鐘牙ゆる石に神秘の龍安寺

大塚 茂子

地下ダムの水豊かなり甘蔗刈

小駒さち子

寒鴉うろつく永田町一丁目

近藤 徹平

冬の雲テントを畳むサーカス団

反町 修

人も風も素通る銀座冬柳

茂木 和子

人はみな土に還りて落葉もや

鳥羽 和風

子の部屋は子のときのまま鬼やらひ

檜鼻ことは

隅の井は城のぬけ穴寒昴

田寺 玲子

○現代俳句一月号——「第一回現代俳句『風を詠む』より」欄

佐怒賀正美氏の秀句五句鑑賞に

隅の井は城のぬけ穴寒昴

田寺 玲子

○幻（西谷剛周主宰）一月号——「受贈誌拝見」欄

秋の蚊よ目減りしてゐる隠し酒

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）一月号——「受贈誌御礼」欄

序の舞の形にひらく秋扇

鬼之介

○雪嶺（石本雪鬼主宰）一・二・三月号——「受贈誌」欄

民草は「くさ」にはあらず遠青嶺

鬼之介

日和下駄来よ新涼の整

〃

○玉梓（名村早智子主宰）一・二月号——「他誌拝見」欄

川幅を広ぐるやうに流灯会

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）一月号——「諸家近詠」欄

風鐸を鳴らしに山を秋の風

鬼之介

○笏（山本一步主宰）十二月号——「受贈誌の一句」欄

猫車ぼつんと置かれ青田道

清水 桂子

○笏（山本一步主宰）一月号——「受贈誌の一句」欄

星まつり願ひ事なき百寿かな

新 曆文

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼 (敬称略)

令和七年一月三十一日現在

洪谷きいち	3	石山かつ子	5
松宮保人	10	清水桂子	1
野口和子	3	梅澤佐江	2
山岸久美子	1	反町修	2
大村節代	10	保坂翔太	1
石山かつ子	10	正木萬蝶	1
青木鶴城	10	河野はるみ	1
岡田宣子	10	福田千春	20
武田重子	6	鈴木玲子	2
新春俳句大会より		大塚茂子	1
染谷風子	1	大村節代	1
日高道を	2	椎名泰子	1
曲淵徹雄	2	横山君夫	1
越田栄子	1	小田三芽	1
石田慶子	1	合計	114
小林京子	1	口	口
星野和葉	2	口	口
皆川更穂	1	口	口

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2025年 4月号

徹底プレゼン!

後世に残したい句

- 後世に残った名句たち 井口時男
- 私が残したい句3句

- 三村純也 山口昭男 角谷昌子
- 青木亮人 津川絵理子 若杉朋哉

クラビアン 俳句界NOW 淵脇護

特集 俳界ちゃんネル

令和の新結社たち

- 「息」岡田政信 「あふり」小沢真弓
- 「風信」原田マチ子 「わかば」遠藤風琴

隔月連載

若手句集



座談会 を読む②

- 相子智恵 抜井諒一 堀田季何
- (司会) 井上泰至

- 詠 古田秀 川越歌澄 堀本裕樹
- 賞 高勢祥子 涼野海音 藤井あかり
- 斗者 抜井諒一 西村麒麟 堀切克洋
- 北賞 諏佐英莉 藤原暢子 西川火尖
- 受 伊藤幹哲 佐々木紺 若林哲哉

注目句集 依田善朗 『鷹渡る』

連載陣 宮坂静生 青木亮人 栗林 浩 坂口昌弘 ほか

「俳句界」投稿欄 一流選者11名! 充実の投稿欄

※一部変更の可能性がります。



株式会社 文學の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

後記

今朝（二月十九日）の朝日新聞
天声人語を読んで、衝撃を受けま
した。五九歳の若年性認知症の女
性が行方不明なられた。二年前
の事だそうです。

認知症の行方不明者は年々増え
ていて、一昨年は一万九千人にの
ほり、うち五二〇人が見つからな
かったという事です。この記事を
読んで、先日何げなく買った本を
思い出しました。

「脳に効く早口ことば」サブタイ
トルにとっさに言葉が出ない人の
ためのとあります。そして、現在65
歳以上の日本人の約18〜19%が認
知症だといわれています。認知症
にはアルツハイマー型認知症と脳
血管型認知症があり、早口ことば
で認知機能向上が期待できるのは

アルツハイマー型認知症です。

この辺まで立読みして、衝動買
いをしたのを思い出しました。

今日から真面目に早口ことばを
となえて、なまった脳を鍛えなく
てはと思いました。早口ことばは
アルツハイマー認知症も老化によ
るもの忘れのどちらにも効果が期
待できるということです。

これから、水明創立九五周年を
祝して、大々的に作品の公募が行
なわれます。また全会員が「水と
「明」読みみの俳句二句を作成した
りといろいろな祝事が計画されて
います。協力の程、よろしくお願
い致します。

ところで、遅々として、春になら
ないですね。でも間もなくの事だ
しょう。どうぞ、お体にお気をつけ
て。

（節代）

今月のはてな？

- 匠路（くけじ）
- 草石蚕（ちよろぎ）
- 鳥頭（とりかぶと）
- 鶴唳（かくれい）
- 薄縁（うすべり）
- 鞆（くつ）
- 妻社（つまやしろ）

69 38 35 33 32 23 5 頁

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内にお願ひします。)

水明

令和七年三月号

通巻一三三四号

令和七年三月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区高野四一〇一二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版

令和7年「春の吟行会」

参加申込書 〈申込締切3月21日(金)〉

春の吟行会 3月30日(日)	会費 ¥2,000	出席します
----------------	-----------	-------

※「出席します」を○で囲んでください。

※受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。

2025年3月 日

住所 〒			
氏名		電話	— —

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)

水明俳句会

[緊急連絡先電話番号]

電話番号	— —
氏名	

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。

緊急時のみに使用し他の用途には使用いたしません。

季音抄

山本鬼之介

鶉の瀬から春を立たせる水飛沫
雑煮食ぶ昭和平成令和生き
われらが城は威ありて親し大旦
天地に進行形の露の花
枯木山鋼のやうな芯を持ち
薦被りでんと輝く千代の春
除雪車の唸り地響く深夜かな
白息をかけて手鏡甦る
我が里の海の匂や睨み鯛
この年の序章きりりと寒の梅
自画像と向き合ふ画室冬紅葉
沈金の鶴の舞ひたる雑煮椀
小春日や島の渡しに旅役者
回峰行真似て小走り枯木山
重箱の草石蚕の色にひとめぼれ
つんつんと根魚の魚信寒日和
一天に浮く初富士を遥拝す
枯木立バーコードめく影をゆく

島津初花
鈴木康世
十倉和子
鳥羽和風
永野史代
星野和葉
松宮保人
原田秀子
上戸千津子
松井由紀子
内田恵子
梅澤佐江
笹本啓子
保坂翔太
梅澤輝翠
曲淵徹雄
横山君夫
鈴木玲子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

円窓はしぐれて色のなき季に
 空山の裾のせせらぎ紅葉散る
 竹林の蕭蕭として時雨けり
 蒼天へ鶴唳発し翔び立てり
 軒下に薪整然と冬の雲
 絨緞に遥かなラピスラズリ色
 凧や夫楯にして除けし日よ
 初時雨会ひたき人の名を書きぬ
 初時雨山門へ踏む階の苔
 初雪ひらり肅肅として大鳥居
 絨緞にまどろむ猫の夢ペルシヤ
 空つ風多胡の石碑を磨きけり
 檸檬の香流るるワルツシュトラウス
 伊邪那岐の神話に浸る霜夜かな
 平らかな冬耕の畑輝やけり
 薄縁に伸ぶる枯木のシルエツト
 風花や言葉少なき通夜の客
 凍つる夜や江戸の名残の七曲り

菅原真理
 皆川更穂
 小林京子
 岡田宣子
 池田瑠子
 阿部幸代
 清水桂子
 篠崎紀子
 寺町知子
 霜多光代
 飯田忠男
 反町修
 倉田星歩
 丸屋詠子
 山岸久美子
 菅原卓郎
 新曆文
 綿引まりこ

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 小林京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲昇雄 明淵徹
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明 令和七年三月一日発行 毎月一日発行

(第九十八巻 第三号) 定価 一〇〇〇円